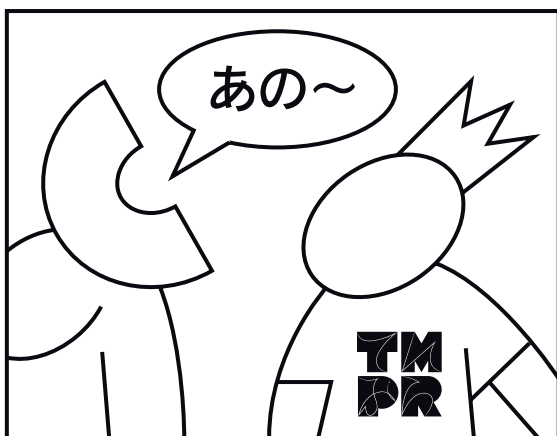
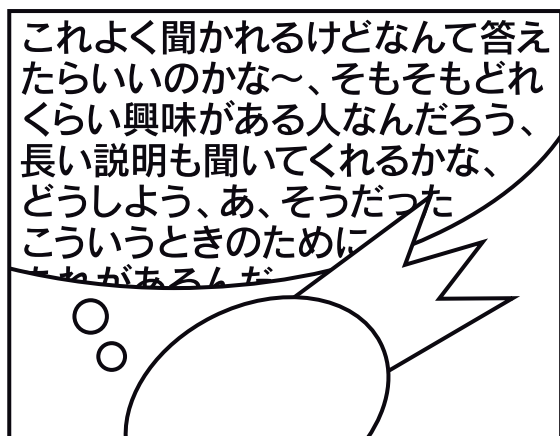


TM PR 通信

PDF版

第一号 2024/5



特集 動点観測所

はじめに

あなたは「AI（人工知能）」について、どんなイメージを抱いていますか。未来的？ 万能？ 脅威？ 人間にとって代わるもの？ いまやAIに関する話題がニュースにならない日はありません。しかし、そもそも、AIをはじめとしたテクノロジーがどのように私達の生活に関わっていて、どのように付き合い合えばいいのかを考える機会意外と少ないのではないのでしょうか。なんとなく抱いている「怖い」という感情や、「なんでもできるんでしょう？」という期待は、本当の本当にその通りでしょうか。過度な畏れでも期待でもなく、技術と人間が「平熱」の距離感で共存することはできないのでしょうか。

『TMPR通信』は、そんな疑問を抱いたチーム「TMPR（てんぷら）」が考案したプロジェクト「AIが見てきた風景を辿る 人工知能紀行*」を紹介するドキュメントブックです。プロジェクトから生まれたワークショップであり、体験型作品でもある「動点観測所」を通し、テクノロジーと日常生活、そして人間の関係を巡るユニークな体験と考察が実施された様子をお届けします。“2024年1月、東京・渋谷（おそらく）世界初のAIと人間が協働する『動点観測所』が開所。そこでは参加者が『作業員』と呼ばれ、機械の指示に従い、まちを観測する——”。SFのような設定のワークショップを体験した人は何を感じたのか。そして仕掛けたTMPRの意図とは。謎めいたプロジェクトから技術との付き合い方に思い馳せていただければ幸いです。

TMPR (岩沢兄弟+堀川淳一郎+美山有+中田一会)

TMPR

(左端から時計回りに)

いわさわひとし

美山有

磯野玲奈 * マネージャー

中田一会

土田誠 * 製作

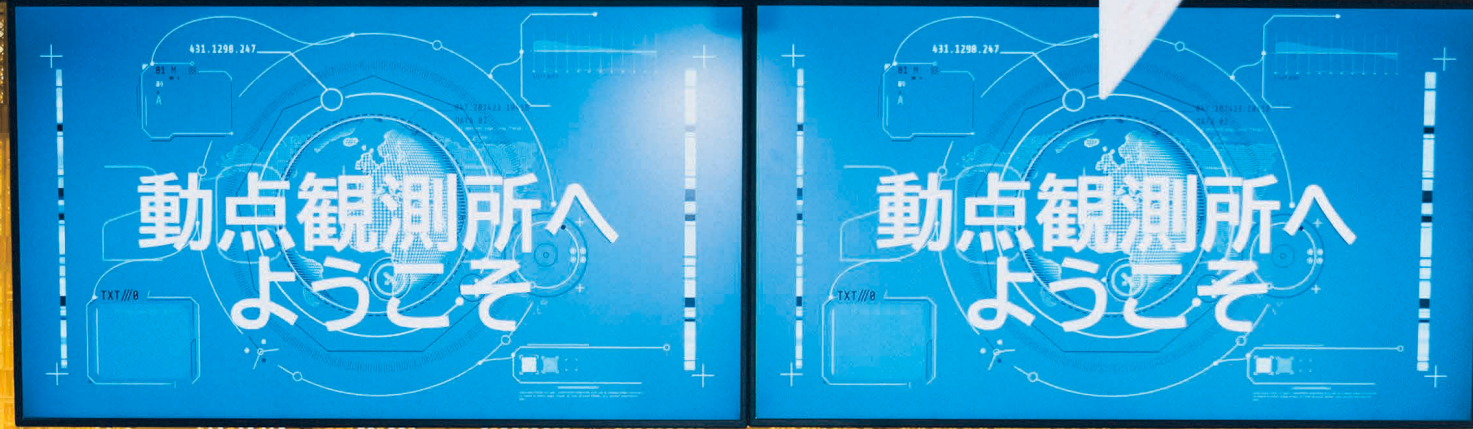
堀川淳一郎

(右上)

いわさわたかし



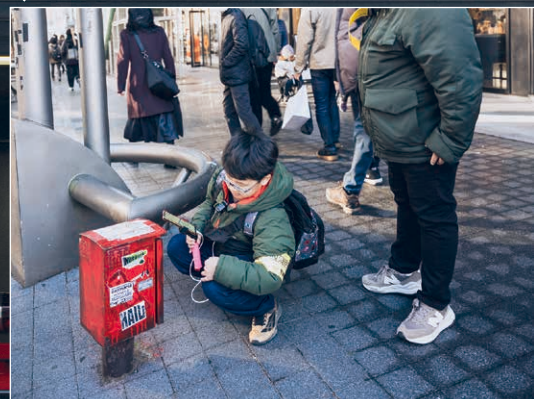
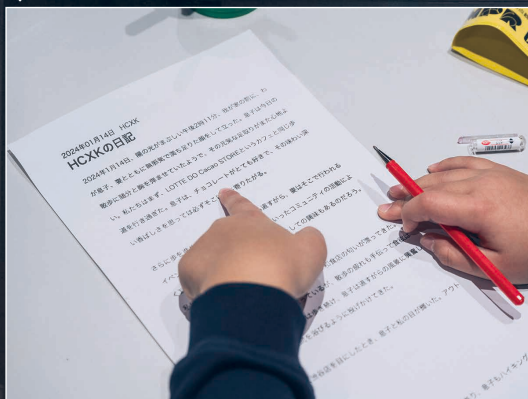
動点観測所(35.39. 36.02/139.42.5.98)



2024年1月12日(金)~21日(日)@CCBT







特集 動点観測所

目次

014 大解剖! 動点観測所

動点観測所を理解するための5つのヒント

- ヒントその1 可搬式動点観測所
- ヒントその2 作業員の仕事
- ヒントその3 コンセプト
- ヒントその4 平面計画
- ヒントその5 空間設計

026 動点観測所開所記念トーク

ゲスト 木原 共

TMPRの反省会

- #1 TMPRメンバー
- #2 山川 陸
- #3 青木 彬
- #4 林 雄司・古賀及子
- #5 柳下 恭平
- #6 萩原俊矢・石川由佳子
- #7 田中元子

035 TMPRの実験室

042 日記のようなもの

067 動点観測所とはなんだったのか? (本当に本当のところ)

- 073 ここに至るまでに考えてきたこと — いわさわたかし
- 074 フローチャート — 堀川淳一郎
- 076 CCBTから見たTMPR — 島田芽生
- 077 動点観測所を巡るあれこれ
— 宇川直宏/いすたえこ/冠 那菜奈
— ただ/丸尾隆一/細川紗良
- 080 TMPRのプロフィール
- 081 あとがき

動点観測所についてもっと深く知りたい 今後どうなっていくのか知りたい
AIが生成した日記を読みたい 作業員の赤入れを見たい
動点観測所ができるまでの経緯を知りたい
体験した人の感想を知りたい
順番通りに読みたい



突如渋谷に現れた「動点観測所」とは、一体何なのか？

ヒントその1 可搬式動点観測所

動点観測所はさまざまな地域を巡り、移動しながらリサーチする拠点だ。可搬式動点観測所は観測所のコンセプトをミニマムな形で体現した試作機（コンセプトモデル）で、動点観測所に必要な機能がすべて搭載されている。今後は離島や山間部のようなエリアにも、観測活動を拡げていく予定だ。次はあなたのまちに現れるかもしれない……！

可搬式(試作)

これが動点観測所だ!!

TECH LAB

衛星インターネットアンテナ↓

空が見えるところなら、衛星と通信することで世界中がどこでも動点観測所になるぞ！

観測カメラ↓

観測者の登録用に使用するカメラ、1,500万画素。

TMPRロゴマーク↓



メガホンスピーカー↑

観測所のお知らせを遠くまで響かせることができるスピーカー。

液晶画面→

観測案内ビデオを上映したり、観測者の現在位置を示したり、色々な使い方ができるように設計された液晶画面。

ルート選択装置↓

観測ルートを決めるための専用装置。60秒以内にジョイスティックを使ってルートを決めよう！

↓感熱紙プリンター

人工知能が書いた日記をすばやく印刷。インクを使わず毎秒230mmのスピードで印刷できるぞ！

↓観測用マイク

風の音が入らないように毛に覆われたマイクで、周辺の音を収録可能。

↑ロボットアーム

文字を書いたり地図を書いたり、腕の先を変えることでレーザーカッターや3Dプリンタにもなる優れもの。

←LEDパネル

文字が流れるLEDパネル。

←電動アシスト自転車

観測所の移動を支える駆動部分。電動だから、重い観測機器を載せても軽々移動できるぞ。

動点観測所 139-42 598

バッテリー↑

電源が取れない場所でも観測を続けられるように、大容量バッテリーを搭載しているぞ。

機械と人間が世界を観測する!?

7 観測作業開始。スマートフォンに表示される指示に従いながら、三十分ほどまちを観測する。

8 出発する準備ができたら作業員登録のための写真撮影を行う。
*実はこのとき撮った写真が日記の生成に使用されるのだが、彼らはそれを知らない。

9 観測作業開始。スマートフォンに表示される指示に従いながら、三十分ほどまちを観測する。

10 観測作業終了。スマートフォンに表示される指示に従いながら、三十分ほどまちを観測する。

おわり

ヒントその2 作業員*の仕事

※簡単に言うと、「作業員」とは動点観測所のワークショップ参加者のことです

1 CCBTのウェブサイトから「作業員」として参加したい日時を選択し申し込む。

2 予約した日時にCCBT内の動点観測所へ行く。受付を済ませたらもう作業員だ。

3 作業員は最大三名のチームを組む。一時間ごとに二つのチームが動点観測所を出発する。

4 チームを組んだら、まずは案内動画を見る。ここで作業の大きな流れを把握する。

「AIが見てきた風景を辿る 人工知能紀行」の着眼点

万能？脅威？未来？……いまや専門外の一般市民に至るまで、ある種の流行としてもその認識が広がっている「AI（人工知能）」。

生成AIによってアウトプットされる文章や画像などの違法性や倫理的問題が指摘される一方で、AIの学習能力を活用したシステムが人間生活を豊かにする事例も頻りに話題に上る。専門外の市民にとっては、なんとなくわかるようでわからないような曖昧なイメージとして、「先端技術としてのAI」があるのではないだろうか。

TMPRは、デザイン分野を中心に異なる特技を持つメンバーで構成されたリサーチユニットであり、デジタルとアナログ、身体とまちを使って「遊ぶ」ことで、身近な物事を捉え直す実験を好む協働チームである。今回のプロジェクト「AIが見てきた風景を辿る 人工知能紀行」では、過度に便利なもの、ときには人間にとつての脅威的なものとみなされがちなAIが、現状では人間活動の軌跡

という「過去のデータ」をインプットとしてようやくアウトプットができていくという事実を体感すること、AIをはじめとした技術との日常における付き合い方を意識的に探ることを試みる。

たとえばスマートフォンを持って歩き、コミュニケーションし、情報を閲覧し、物品を購入し、生活している時点で、私達の日常は「活用可能なデータ」としてシステムに吸収されているという現実がある。しかし、そこから観測しきれない日常の体感や情報は必ず存在していて、決して、システム側が私達の生活を主導しているわけではない。吸い取られたデータが人間の全てでもない。しばしばイメージされがちな「人間vs AI」的な対抗図は、いたずらな恐怖や期待を煽るだけではないだろうか。

つまり、現状においてデジタル技術に対して過度に怯えることもなければ、望むこともないとTMPRは考える。技術と人間の「平熱の共存」のようなものを、もう少し市民レベルから練習してみる必要があるのではないだろうか。その方がきっと創造的かつ主体的に生きられる。

参加型プログラム 「動点観測所」

今回の「動点観測所」は、「AIが見てきた風景を辿る 人工知能紀行」プロジェクトにおける市民参加型の実験として開催する。

「動点観測所」は、「機械と人間が協力して世界を観測する」というストーリーを添えた体験型のリサーチ拠点であり、展示会場としても機能する。市民には「作業員」というフィクショナルな役割を設定し、「観測ワークショップ」に参加してもらう。現代の生活では、AIを活用したサービスを受動的に使うばかりだが、このワークショップでは人間がみずからAIと協働し、AIのための情報を収集する側に立つ点がポイントである。

作業員は、プログラムからアウトプットされた街歩きのリートをチームで歩き、さまざまな発見や体感を得る。約三十分間の散策を経てふたたび「動点観測所」に戻ってくる。ルート情報や作業員の顔写真などを元にAIによって生成された日記風の「観測レポート」が手渡される。そのレポートについて作業員はスタッフ

から添削を求められ、自分自身の体験とAIの予測の差を明らかにする。添削されたレポートは展示室に一覧として掲示される。

人間が実際に歩き感じた「人間の体験」と、AIが過去の情報や類似の体験を元に生成した「AIの予測」には、まず間違いなくギャップが生まれるが、一方で「もしかしたらこれは自分の体験かもしれない」と思えるような驚き（ある種の不気味さを伴う）が生じる場合もある。

「世界をリサーチする拠点」というストーリーの元で、人間とAI、体感とセンサー、過去情報とリアルタイム情報など、日常に潜むテクノロジーに対して親しみと同時に違和感を持ち、思考をめぐらすこと、その軌跡そのものを記録し考察することが本プログラムの目的だ。

必ずしも実用的ではない方法を通じて大きな規模で体験してみること、先端技術としての曖昧なイメージが先行しがちな「AI」との遊び方・付き合い方を捉え直しつつ、「日常」「技術」「まち」「身体」など、身近すぎるがゆえに捉えづらい概念を改めて知覚し、その姿を顕にし、考え直すきっかけを生み出したい。



動点観測所開所のご挨拶

動点観測所は、AIと人間が協働するおそろく世界初のリサーチ拠点です。人工知能(AI)、位置情報、グラフ理論、画像解析、そして人間の五感と身体を駆使し、各地に期間限定の拠点を開いては、まちの情報を収集していきます。記念すべき拠点第一号として、東京・渋谷にあるCCBTに9日間限定の動点観測所を設けることになりました。

Welcome to the Moving Point Observation Station No.1
The Moving Point Observation Station is probably the world's first research institute for human and AI collaboration. Utilizing artificial intelligence, locational data, graph theory, image analysis, and the human body and senses, it opens facilities in places for fixed periods of time and collects data about the local area. The inaugural research station is in Shibuya, open for nine days inside Civic Creative Base Tokyo.



反省会
本日のゲスト：
動点観測所の「観測ワークショップ」に参加した人はどんなことを話したのか？ TMPR(てんぷら)メンバーの他、ワークショップを体験したゲストが毎回登場し、思惟のない「反省会」を繰り広げます。ワークショップ開催のみならず、さまざまな視点を持つ人と体験の振り返りを通して、技術と人間の付き合い方を考えます。
18時
本日18時半より
@tokyo_tmpr で配信!

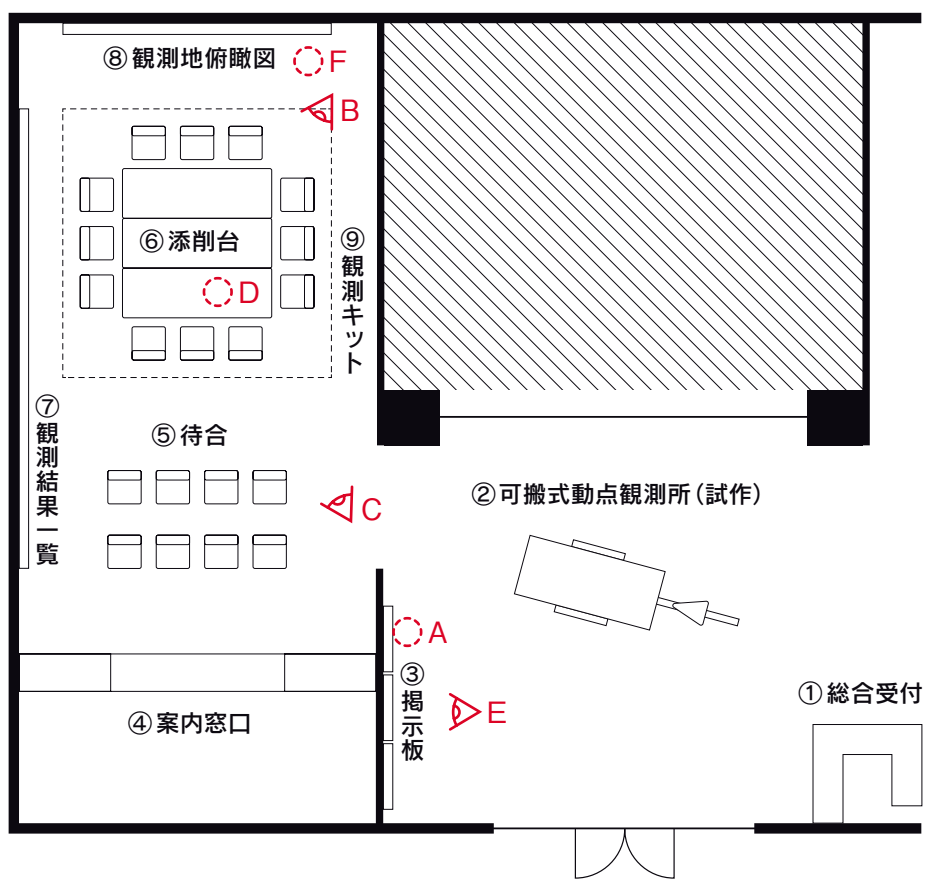
動点観測所開所記念!
TMPRアーティストトーク with 木原共
AIと人間が協働するおそろく世界初の観測所「動点観測所」(2023.10.02-10.10)の開催を記念して、TMPRが取り組むプロジェクト「AIが読めてきた風景を語る人工知能記行」を紹介するアーティストトークを開催します。ゲストには、2022年度CCBTアーティストフェローのTomo Kihara + Playfootより、本拠地をお借りします。*後援：人工知能の未来研究会、東京都TMPRと「AIと人間の協働による未来の探求」に賛同したTomo Kihara+Playfootが、AIとの共存/共創の先に見える未来について、共に語り合います。
1月13日(土)18:00-19:30
ぜひお集まりください!



所長からの@たより
地図情報や観光情報、路上の眺め、上空からの写真、人々の体験談、ちょっとした眩きまで、あらゆる物事がデータ化され、検索可能になった現在。世界を知りたいならAIに聞けばいい……のでしょうか？ いいえ、人間からすれば、世界はAIが出力する情報よりずっと複雑です。AIからすれば、その要求に応えるためのデータが足りません。だからこそ、動点観測所では、AIと人間が協働してデータ化しきれない物事を観測するのです。



TMPR
(若沢兄弟+堀川淳一郎+美山裕+中田一會)
デジタルとフィジカル、ハイテクと手作業、モノの視点とヒトの視点を行き来しながら、まちと遊ぶリサーチユニット。立体デザイナー、立体プログラマー、平面デザイナー、対物プランナー、対人プランナーが協働中。2023年結成。読み方は「てんぷら」。
Instagram: @tokyo_tmpr



② 可搬式動点観測所 (試作)

動点観測所はさまざまな地域を巡り、移動しながらリサーチする拠点。可搬式動点観測所は観測所のコンセプトをミニマムな形で体現した試作機(コンセプトモデル)で、動点観測所に必要な機能がすべて搭載されている。今後は離島や山間部のようなエリアにも、観測活動を拡げたい。

④ 案内窓口

作業員を案内するための窓口。作業員はここで観測作業についての説明を受け、観測ルートを設定し、スマートフォン+カメラを備えた観測キットの貸出を受けてから渋谷の街中に出発する。観測中は、上部のモニターに作業員視点のライブ映像が流れる。

⑤ 待合

観測ワークショップに参加する作業員が案内を待つ場所。1時間に2組ずつ、合計10組が毎日活動する。観測ワークショップは事前申し込みを受け付けているが、空き枠があれば当日でも参加できる。参加を希望する人は総合受付へ。

⑥ 添削台

街中の観測作業から戻った作業員が、観測レポートを添削するための場所。観測ルートや作業員にまつわる情報をもとにAIが生成した日記風の文章を確認し、必要があれば訂正やコメントを入れる。

⑦ 観測結果一覧

AIが生成した観測レポートをもとに作業員が添削したレポートが並んでいる。印刷された文字はAIが生成した文章で、赤文字は作業員が記入した添削内容。AIが予測する日記と人間の体験は果たしてズレがあるのか。それともシンクロするのか。

⑧ 観測地俯瞰図

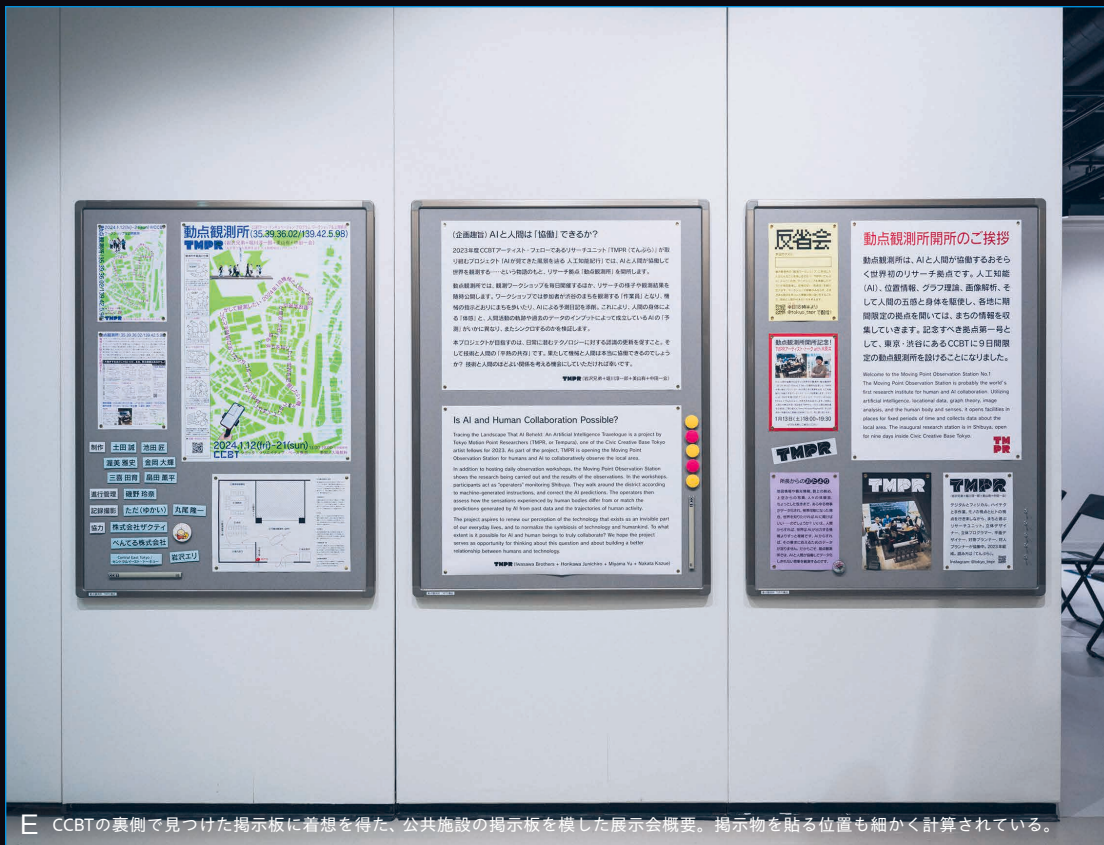
CCBTを起点に生成された観測ルートと観測作業に出ている作業員の現在地が俯瞰できる。スクリーン前のスイッチを押すと表示が切り替わる。

A 動点観測所の入口横の掲示板上には、動点観測所のステートメントやイベントの告知がふつうの掲示物をつけて貼られている。



B 黄色いオリコンを重ねて作られた案内窓口が映える、動点観測所の内部。観測所員は交通指導員のような揃いの制服を着ている。

向かって右側の壁面は、釘を打ち込むことにより磁石で壁面に日記を張り付けられるようになっている。



E CCBTの裏側で見つけた掲示板上に着想を得た、公共施設の掲示版を模した展示会概要。掲示物を貼る位置も細かく計算されている。



C 奥の観測地俯瞰図には、観測作業中の作業員の観測ルートと現在位置が表示されている。



F オリコンが入っていた段ボールを再利用して作られた、観測地俯瞰図の操作ボタン。ボタンを押すと画面が切り替わる。



D お盆のスケートボードに載った動点観測所のハンドアウトと、ポテトチップスの空き箱を使ったペン入れ。



メガホンスピーカーなど動点観測所の備品には、管理用のテプラやTMPRロゴが貼られている。



スタイロフォームでできたTMPRのロゴ。



可搬式動点観測所に取り付けられたパトライト。これも人感センサーに反応して光る。



ロボットアームは人感センサーに反応し、先端に取り付けられたTMPRのロゴをくるくると振り回しながら動く。

動点観測所開所記念トーク

With 木原共（二〇二二年度CCBTアーティスト・フェロー）

AIと人間が協働する（おそらく）世界初の観測所「動点観測所（35.39.36.02/139.42.5.98）」のオープンを記念して、二〇二四年一月十三日にトークイベントが開催された。ゲストは、TMPRと同じCCBTアーティスト・フェローとしての活動も経験されたアーティスト・木原共さん。「技術と人間の平熱の共存」を目指すTMPRと、「AIと人間の相互進化の探求」に取り組んだ木原さんが、互いの作品制作を通じて語り合った。AIとの共存／共創の先に見据える未来とは。

木原共 メディアアーティスト/
ゲーム開発者
いわさわひとし TMPRメンバー
いわさわたかし
堀川淳一郎
美山有
中田一会
島田芽生 CCBT
田部井勝彦 （出演者）



木原共 Tomo Kihara

メディアアーティスト/ゲーム開発者

新たな問いを人々から引き出す遊びをテーマに、実験的なゲームやインスタレーションの開発を行う。アムステルダムに拠点を置く研究機関Waag Futurelabや米国のMozilla FoundationとAIの社会的影響に焦点を当てたプロジェクトを行う。



人間の記憶を揺さぶる 体験設計

島田 まず木原さんに「動点観測所」プレ体験会の感想を伺いたいです。

木原 すごく楽しかったです。僕たちのCCBT展示¹は、直前も会期中も本当に大変だった記憶があった。だからテストプレイの段階であんなにきれいに、ソフトウェアが一回もバグらずに最後まで行けたのはすごいなって思ってた。作品でやるうとしてることは僕たちと似てると感じつつも、アプローチに違いもある。だからいろいろと聞きたいことがあります。

島田 具体的にはどんなことでしょうか？

木原 まず、今の形に至るまでどういうバージョンを経たのが非常に気になります。特に「まちあるきを体験した後AI日記を渡されて添削する」というフローがすごく素敵だなと感じました。おそらく、日記をリアルタイムで表示するみたいな表現もありえたと思うんですけど。あえてそれをやらないことに重要な意

味があるのではないかなと。たかし 初期アイデアでは逆の順番なんです。AI日記が先に出て、まちを歩く想定でした。



美山 制作過程で議論していくうちに、AI日記を先に提示するフローの場合、まちあるきが「答え合わせ」になってしまいうるさに気づいたんですよ。歩くという行為って、本来は具体的な記憶が残りにくいと思うんです。その人間の曖昧な記憶とAIの予測のあいだでどんな認知のズレが起こるかという実験を重視した

ていつて、結果的に日記じゃなくても画像の説明になっちゃうんです。それもあって、日記らしいテキストってなんだろうというのも議論してきたことのひとつでした。

木原 あれは、日記なんですかね？結構、恐ろしさも感じたんですけど。日記を読まれた方とかわかると思うんですけど、体験したチームについて「AさんとBさんは昔から一緒に働いている親友である」みたいなことが書いてあって。あながち間違ってもない関係だったんですが、そういう記述に結構ぞわつとしました。日記なのかな。誰かのエッセイのようでもあって。

中田 ちょっとエッセイっぽいんですよ。

島田 他の体験された方にも感想を伺ってみたいですね。AI日記を読んでもう感じましたか？

会場参加者A 私の場合、指示どおり歩いたコースに、普段からめちやくちやく行くお店があったんです。だ



美山 正直にいうと、実際に

かった。

たかし 昨春秋に公開制作と称してプロトタイプ開発とテストプレイをやっていたんです。自分たちでテストプレイをしてみても、先にまちあるきをして、そのルート情報をもとにAIが生成した架空の体験文章を試しに出力した。そうしたら、自分の体験とAIの文章が記憶の中で混ざるような感じがしました。実際にはなかったことも「そんなことあったかも？」的な感じでした。その揺すぶられる感じが面白かった。ということは、この感覚を体験のピークにした方が面白くなるだろうと。

木原 なるほど。僕自身は、どの情報を収集しているのか開示されない状態で歩くことが、体験としてすごく楽しかったです。この行為は後の日記にどう反映されるかな？と考えながら歩く。ある種の逸脱を楽しむ感覚があった。例えば、途中でガチャガチャショップに寄って、この猫のフィギュアを買ってみたんです。それで装着していたビデオカメラの前にこのフィギュアを定期的に出しながら歩いてみたんです。AI

の出来事とAI日記の内容が重なっているのは偶然です。どちらかというと、そういうこともあり



そういう文章を読んだとき、記憶の中から「あっているかも」という部分を拾いたくなるのが人間の心理かもしれませんね。

たかし そうそう。だからやっぱり占いの師的なやり方の表裏ですよ。人間の認知的欲求にはきつと、情報や記憶をつなげなくなる部分があった。あなたが歩いた体験に接続しますよ」と渡されたAI日記を前にすると、まつさらな気持ちが続めなくなるという。

AIと付き合う練習 がしたい

会場参加者A そういえば一緒に歩いたのは初対面の人だったんですが、AI日記には「旧来の友」みたいに書かれていました。体験前に撮影した写真で、一緒にっこり笑った

日記に「猫がいた」とか書かれるのになって期待して。後になってビデオカメラの情報は日記生成に使っていないことを知ったんですけど、それでも、その試行錯誤とか期待そのものが楽しかったんです。その体験設計はさすがだな、と。

AI日記にぞわつとする理由

中田 体験された方の多くがその期待をされながら歩いているようです。ただおっしゃるとおり、今回は動画や音声はデータとして取得できなかったものの、あえてAIには読み込ませていないんです。

たかし もちろんデータ量などの技術的制約もあるんですけど、読み込ませていない意図としては、画像や動画などの情報を無理やり文章にしても、議事録っぽくなってしまうからなんです。例えば、まちの写真とか地図画像を読み込ませると、AIは解析しやすいものから処理しようとする。画像内にある看板や地名などの文字を認識して、そこから派生する情報を無理やり文章にし

ので、仲の良い友人だと思われたのでしょうか。あと「グラフィックデザインと文化人類学についてお互い興味がある旧友」みたいなこと書かれていました。私はデザイナー的なおしやれ顔なのか？とか。妙にうれしかったです。中田 そういふ誤解を喜び

人、他にもいらつしやいました。全然違う職業の方が「ミニマリスト風のアートディレクター」って書かれて、「なんかうれしかったので添削のときに赤入れなかつたです」っておっしゃっています。他の方はいかがでしたか？

会場参加者B 私たちの場合は、AI日記の内容は、何も当たってない印象で、逆パターンでした。上から下まで、何もかすってない。歩きながら結構盛り上がった話は全然書かれていなくて。だからぞわつと感ずる部分はなかつたんですが、なんかAIのポンコツさが割と可愛いっていか、ウケるなあと感じました。

中田 その感想もうれしいです。生成AIに過剰な期待や恐怖を抱かせる

ようなニューズをよく見かけるものの、実際は人間の活動とか過去のデータをもとに生成している。今回でいうと、ほんの五分前にまちを歩いた人間のほうが、まちの最新情報や解像度の高い体感を持つています。だから、AI日記と自分の体験を比べたときにはポンコツ感を抱いて当然ですよね。コンセプト文の中に「技術と人間の平熱の共存」と添えた意図もそこにあります。ただTMPR内でも意見はそれぞれ違うかも。人間の体感とAI予測のズレの部分は、技術的なやり方によってますます追いつけることもあると思うんですけど。

たかし 追いついたところで話じゃないですか。僕たちとしては三十分まちを歩いて正確な日記が生成されることがゴールではないから。AIはもう世界に存在しているし、これからもっともつとチューニングされてくし、自分たちの情報もどんどん与えていくことになるだろうけど、人間が記憶したり記録したりっていう行為は、そのまま並列で残るはず。AIがいるからって人間による人間の記録はなくならない。

てます」みたいな。
中田 あるいはこどもに何かするかもしれない人を見ているのか。
堀川 どちらにしろ嫌ですね。自分はそのデータを何に使われるかわからないじゃないですか。
木原 それはそう。エンジニア的な感覚はそうですね。
田部井 自分は防犯目的のサインなのかと感しました。
木原 そうなんです。基本的には通学路にだけあるみたいな想定で、お子さんの行き来を見守りする文脈です。
田部井 防犯カメラ設置でもある議論ですが、「何かあったらどうするんだ」には反論がしにくいから、こういう装置って置くことになっちゃうんですが……嫌な気持ちにはなりません。なんとなく。
たかし 自分は「通学路 顔認識 中」って文字を見て、「顔認識 中学校」って学校の略称だったら面白いなとか妄想が広がっていたのですが、そういうことではないですね……こどもの見守りなのか監視なのかってことも、何をもって犯罪者とするかってことも、本来はグラデー

中田 そうですね。
たかし だからこれからも当然のように双方が存在していくなかで、人間はどういう振る舞いをするかという練習をしたい。みんな練習してみると、AIのポンコツさが可愛いと感じることもあれば、確かにすごいかもねって思うときもあれば、占い師っぽいアブローチだよってっていうような話が出てくることもある。いろんな感想が出てくればいい。今ってバズワードが好きな人たちが、「AI全知全能ですよ」と盛り上がっている段階。でもそこじゃないところに面白さがあるはず、と思っています。



ションがあることなのに、バキッと分断してしまいそうな感じがすごく嫌ですね。
木原 なるほど、なるほど。アーツ前橋のワークショップでは、ものすごく意見が分かれました。お子さんがいる方は「あっても大丈夫」みたいな感じ。もうちょっと若い学生さんは「絶対に嫌だ」と。それで今度は「顔認識中」のサインがあったら嫌な場所にARを配置してくださいというワークショップをやったんです。その中で、ゴミ捨て場に顔認識中の看板が設置されたパターンが出てきて。それは通学路よりも嫌だという意見が多く出ました。こういう技術活用感覚って人によって非常にギャップがあるんです。だから僕自身は、とある技術の可能性について、ポトムアップで遊びながら模索できるといいなと考えています。

誰が監視しているのが大事？

たかし このワークショップができていることも興味深いですよ。シ

もしも「顔認識中」サインがあったら

木原 僕自身はオランダでの活動経験から、AIをはじめとした監視テクノロジーを非常に危険だと受け取って規制しようという欧州の感覚と、日本の感覚にはギャップがあるなと日頃感じていました。日本の場合、テクノロジを過度に怖がるわけでもなければ、便利なものだと思ひこなしまくるわけでもない。その中間みたいなところを目指していけるのが、ある種の良さなのかなとも思っています。そういうことを市民と一緒に考えるといったプロジェクトもやっています。今まさに進行中なのは、ありえるかもしれない未来の世界からきた看板や標識をAR上で設置する《Future Colider》という作品です。近い将来に存在するかもしれない架空の看板や標識をもとに、それが存在する社会を考えてみようってプロジェクトなんです。例えば「バイオ肉ランチ990円」という看板がある景色から、未来の食生活について想像してみるといった感じです。

ンプルなアイコンでも意味が伝わるし、その技術の存在は理解されている。じゃあどこで認識されると嫌なのかという議論もできる。
木原 まさにそうです。これをつくったとき、むしろ「顔認識中」と表示されている状態の方が信頼できるなって感じなんです。なぜなら、顔認識システムは今すでに世界中に存在しているからです。渋谷でAIカメラが百台設置され、個人をほぼ特定できる形で24時間追跡しているベンチャアの取り組みがネットで炎上したことがありますが、あれはかなり怖い。僕自身もすごく嫌なんです。そうやって何も言わずに監視されているぐらいだったら、「顔認識しているよ」と言ってくれた方がまだ誠実だなと。だとしたらその逆の「ここで顔認識してません」みたいなサインの可能性もありますし。
堀川 「顔認識中」の場合は、誰が認



photo : shinya kigure

中田 なるほど。おもしろいですね。
木原 このプロジェクトを展開している群馬県前橋市ってテクノロジ活用がなかなかユニークなんです。自動運転バスに顔認識で乗れる実証実験とか、商店街での十万円以下の決済なら顔認証で店舗決済ができるようにする構想とか。僕としては市民の人たちがそういったテクノロジをどう受け止めているのかに関心があつて。例えばTMPRのみなさん、これはどう思いますか？ 上が通学路のサインで、下に「顔認識中」と書いてある標識です。下の方はプロジェクトでつくった架空のものです。
美山 嫌です。とりあえず嫌な感じ。
ひとし ターゲットマークがついてればいいんじゃない。「こどもを見

識しているのかも表示してほしいですね。データを誰が使っているのか。
美山 なるほど、そこですね。ゴミ捨て場で顔認識されているのが嫌なのって、監視してる相手の顔が思い浮かびやすいからかも。誰も管理してなさそうなところに置かれてたら、管理者の顔が思い浮かばないから、「実際は見えないかも」みたいな気持ちになるかもしれない。
堀川 うーん、自分は、このサインを見たらまずオーソリテイ（権力側）がやってんだらうなって思うから嫌なんです。
木原 そうですよ。これがさきほどの話題にも繋がるんですけど、「動点観測所」の体験にまちなかの顔認識ほどの怖さがなかったのはこの点なんだと思うんです。誰がやっているかがわかっている。TMPRという五人のクリエイターチームの企画なら、まあ何しても、されても大丈夫かなという感覚がありました。その一方で、謎の企業が渋谷の街に百台のAIカメラを設置していますという

AI日記が逸脱の選択肢を生む

のは、すごく気持ちが悪い。田部井 フェアじゃないんですね。一方的に見られればなしで、「私が見てます」みたいなのがカメラの横にあればまだいいけど。サイレントに見られているのは気持ち悪いですね。

たかし 木原さんはTMPRだからとおっしゃってくれましたが、「動点観測所」で言うと、体験者としては誰か具体的な人物がデータ活用しているのではなく、AIがものすごく機械的に処理していると感じているのかもしれない。生成された日記が、どこか神の視点みたいな描かれ方になっているし。今までの議論だと、誰が監視や判断をしているのが大事だという流れでしたが、そもそもその「誰」が人間じゃない可能性もありそうですね。

木原 そうですね。一方で客観的にアウトプットされているように見えるから、あたかも人間ではない公平な存在を想像しちゃうんだけど、本当は学習データのバイアスなどがあるし、そんなことはない。客観性の誤認ともいえる感覚が人間側にはありそうですね。

で、その心配は薄れる気がして。ひとまずAIの進化に恐怖を持たなくていいんじゃないかなとは思いますが、そもそもAIを「人工知能」と呼ぶか、ということ自体もちよつと悩むところなんですけど、知能があるように見えるものとの付き合い方としては、我々は肉体があるうちは大丈夫かな、と。

美山 私は普段から手を動かして考える方なんです。頭で考えているのか、手で考えているかわからないっていうタイミングがあったりして。だから、人間に身体があつて、例えば職人技みたいに身体感覚でつくるものがある限り、AIができることは違う領域が必ず残ると考えています。AIって目と脳しかないよな気がしてるんですよ。画像生成とかテキスト生成とか上手なんですけど、「身体がない」感じがずっとあつて。AIに生きてる身体みたいなのがくつついたらちよつと怖いんですけど、それが無い限りは、人間が勝つ隙間っていうのはいっぱいあるんじゃないかな、だから怖くはないなと思っっています。

ひとし 僕も美山さんと近いです

という日記データが反映されているようです。

中田 つまり、このままロンドンに住み続けると木原さんの具合が悪くなるから、精神科にかかったりセラピーに行かなきゃってAIが判断したわけですね。

木原 そう。しかも、圧倒的に客観的な記述である点もなんだか怖いんです。実際はロンドンに住み続けていてもそうはならないと思うんですけど……一方で、なんか、完全に否定しきれないかと戸惑っている自分もいて。なんなんだろうね、この感覚は。生成された日記に対して抱く感覚についてもこれから掘り下げていくことだと思えますが。

たかし 興味深いです。「動点観測所」でAI日記を渡す順番を悩んだ理由にも重なりますね。まちあるきをするより先にルートと日記が提示されてしまうと、それをなぞるべきかどうかという選択肢が現れるじゃないですか。普通に「ただ歩く」が難しくなる。人間って実は、普通に生きてる中でもたくさん情報処理しているはずなのに、テキスト化されてしまうと急に意識的になってしまう



会になつてると面白いなと思っっています。「人間とAIを分けるなんて！」みたいな世界。そういう議論が生まれるようなところまで、想像を膨らませたいですね。

木原 僕自身の興味エリアとしてはゲームデザインみたいなところがあつて。フラットにAIと呼ばれているLLM(大規模言語モデル)とか画像認識とか、もろもろを使って、まだ開拓されてないタイプの遊びをつくる。それで、誰よりも最初に俺がそれを遊んで楽しむみたいところが、一番のモチベーションです。そこが大前提としてありつ、何かで遊べるってことは、ある種それを理解できることでもあると思っっていて、難しいものを誰もが遊べるようにする可能性もあるし、その意義もあるんじゃないかなと思っっています。

島田 ありがとうございます。それぞれの今後の展開も楽しみなトークでした。

う。そこに戸惑う感じ。
木原 そう。《明日たちの日記》で書かれた未来のスケジュールも、たまに僕の本当の予定と重なっているところがあるんですよ。来月どこどこで作品制作をして、現代美術館に行く予定がAI日記に入っていて、「あー合ってる！」みたいな。すると、人生もそつちのルートに行つてしまう怖さがあったりして。現実とシミュレーションの間にある落差も面白いなど感じています。

AIと、どう付き合っていく?

島田 最後にAIと付き合っていく上でのヒントを伺ってもいいでしょうか。何が鍵になると思えますか? 一つ共通点として「遊び」のようなものもある気がします。

たかし 付き合い方、コロコロ変わつてますね。AIが生成するもので楽しむのは別にいいじゃないと思うものの、自分で考えなくなることへの心配は多少ありますね。だけど、今回のように「肉体が移動する」という人間側の能動的行為が入ること

(二〇二四年一月十三日於CCBT)

(1) 展示

Tomo Khara + Playfoot 「Deviation Game ver.1.0」(会期:二〇二三年三月四日~二十六日/会場:シビック・クリエティブ・スペース東京「CCBT」)のこと。過去の模倣が得意なAIを使って何かを生成するのではなく、その表現が過去に存在したかどうかをAIに識別させることで、過去から逸脱した表現の可能性をゲーム型の参加型作品で探った。

(2) 公開制作

TMPR「AIが見てきた風景を迎える人工知能紀行」公開制作(会期:二〇二三年十月二十三日~十一月五日/会場:エトワール海渡シヨールーム一階。国際芸術祭「東京ヒエンナレ」(二〇二三秋会期)のプロジェクト「セントラルリスト東京2023/OPENSTAGE」にて、都内まちなか(中央区)にTMPRのオープンラボを開設し、制作風景を公開した。詳しくは65~71頁にて。

(No.) Future Collider

近い将来に存在するかもしれない架空の看板や標識を、現実ARで設置することを通して都市の未来を共同で試作/思索する市民参加型のプロジェクト。二〇二一年からオランダ・アムステルダム、千葉県松戸市で展開され、二〇二三年十一月には群馬県前橋市の「アーツ前橋」でワークショップが開催された。

(4) 明日たちの日記

POPUP & WORKSHOP「明日たちの日記 Diary of Tomorrow(s)」(会期:二〇二三年八月二十四日~八月二十九日/主催:コクヨ・ココ研究所)。木原さんの日記だけではなく、ワークショップ参加者も自身のカレンダー情報を提供することで、未来の日記を手にするこ

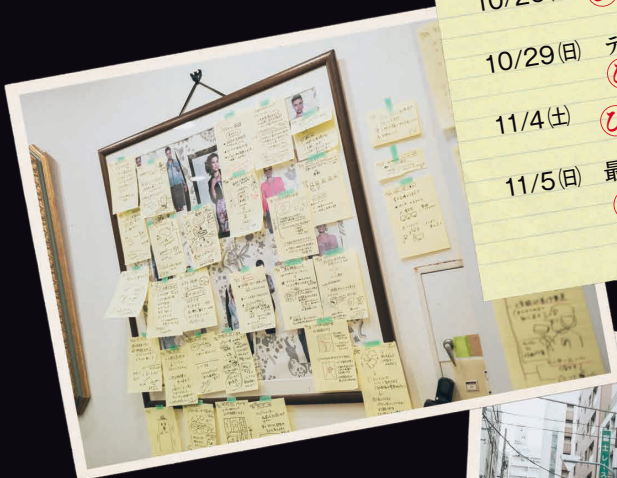


CET滞在スケジュール

10/23(月)	展示スタート	ひた 堀美 中
10/24(火)	ひた 堀美 磯	
10/25(水)	ひた 堀美	
10/26(木)	ひた 堀美 中	
10/29(日)	テストプレイ	ひた 堀美 中
11/4(土)	ひた 堀美	
11/5(日)	最終日、写真撮影	ひ 堀美 中 磯

TMPR の実験室

CETでの7日間



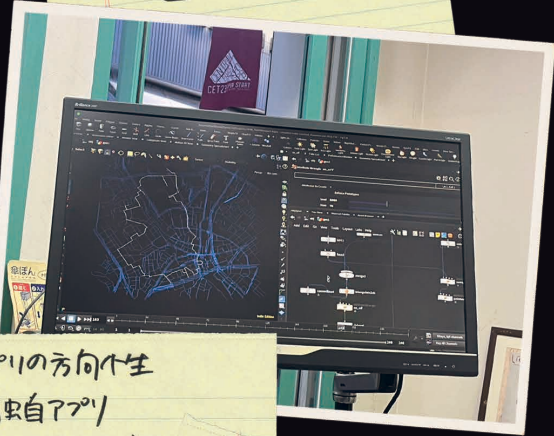
てんぷらの反省会

書籍版をお楽しみに……

二〇二三年十月二十三日
十一月五日、「TMPR
の実験室」と称し、東京・
馬喰町エリアで公開制作
を実施。アートイベント
「セントラルイースト東京
2023 (CET)」内で実
施し、体験設計からネーミ
ング、テストプレイまで、
さまざまな「実験」を展開。
動点観測所はこの七日間か
ら生まれた。



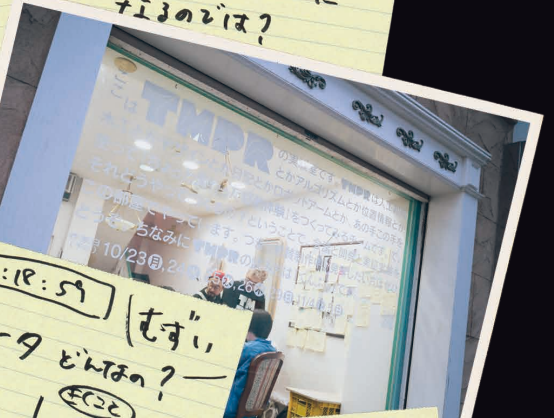
10/24 04:05:00
① 形をえらぶ (地図はあきらむ)



10/23 00:02:40
100的77系展示は渋谷のまちに負ける
暗いシンボル ← 黄色いカゴ

10/23
体感型のツール どうする??
"身ぶらげ"があとと体感型にとって/イスにたすのは?

10/23 00:32:36
ルートのぼり
暗いシンボル ← 黄色いカゴ
ポイント
ボタンの配置



10/24 アプリの方向性
① 独自アプリ



10/24の実験の結果
この画像をモティに300字の日記風の文章を書いてFTE!!
これはUCFの10/24を(800?)
・年代
・性別
・気分など
この組み合わせがよさそう
*丁寧な日記にしたいための10/24? 文体?をまとめる開発する

ChatGPT
日記の生成について (00:34:29) → 不要な部分
1. 不要な画像をよみこむ
→ 画像で自らの項目をモティに文章を生成している
2. Map上のルート (Google Map) を表示したスクリーンをよみこむ
→ 地図上に表示された場所の名前をモティに生成している (いちごちゃんとか)
→ 白地図はどうなる?
3. 写真とルートのスクリーンをよみこむ
人の顔がうろたいてOK
ちゃんと生成してくる

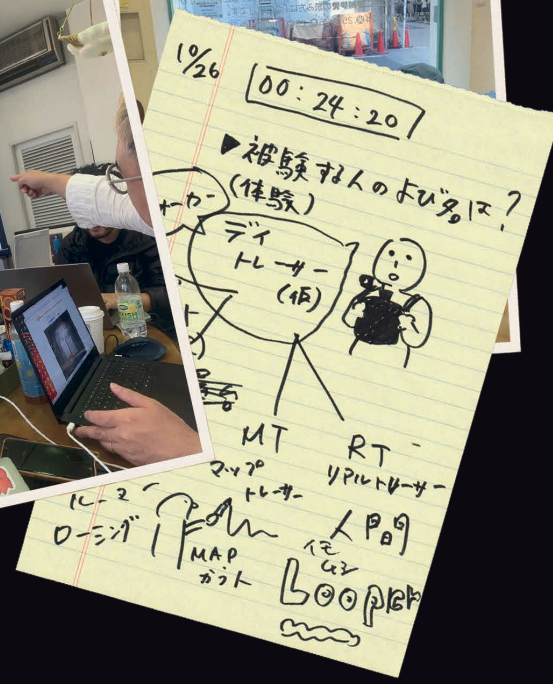
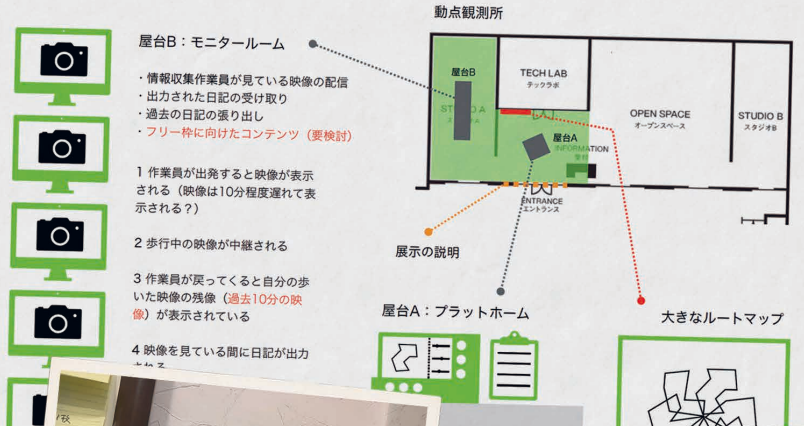


10/23 00:18:59
10/23 01:18:47
TMPR
ストーリー設定
AI
ストーリー設定
道に全部かきつけた
距離
角度
ルート? 距離
AIの記憶
洗った
具体的
差を
かきつけた

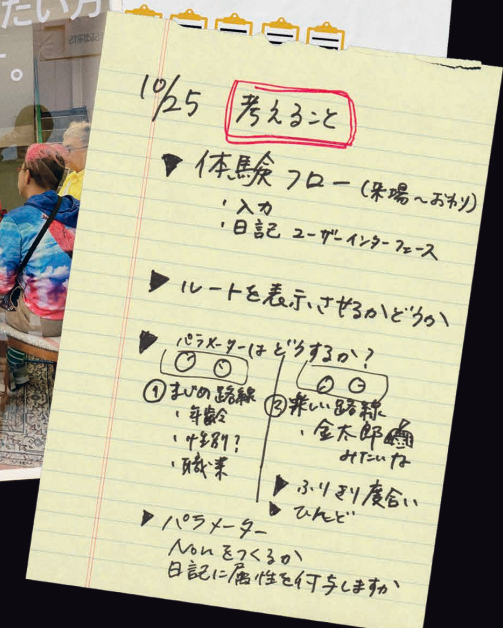
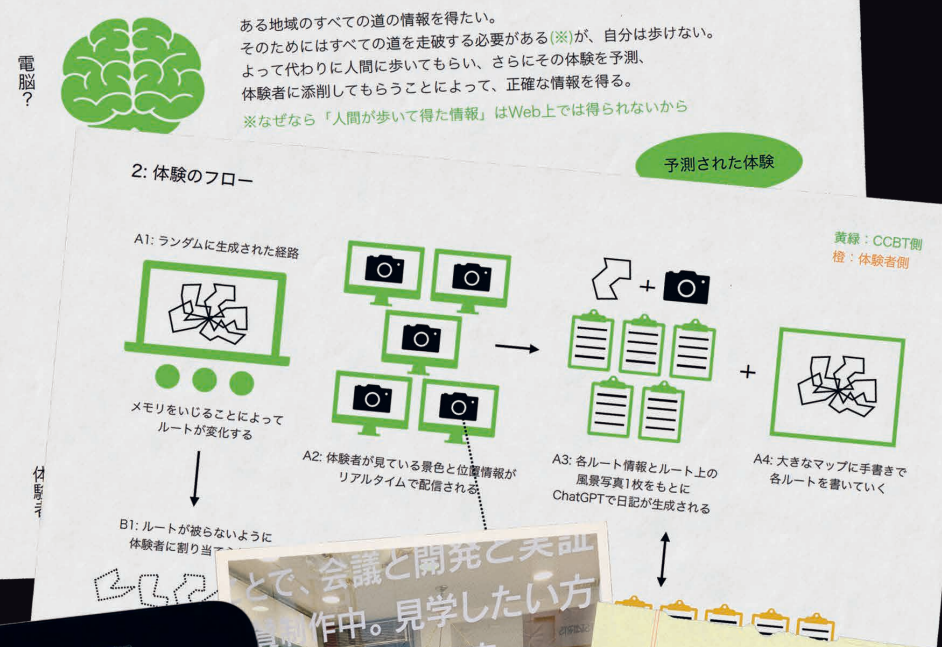
二日目。一日目でふんわりと体験の流れや目指すところが見えてきたので、この日は主に体験の要であるルートと日記の生成方法について、実験を進めながら検討した。約三十分の散歩ルートは、なるべく毎回生成されるルートが異なるものになり、各ルートが複雑なものになるようにプログラムを設計していくが、複雑さを出すのが難しい。同時に、生成したルートが体験者の持つデバイス上でのように表示されるのかも検討していく。日記の生成に対しては、ChatGPTにルート上のストーリービューの写真を与えてみたリ、地図上に表示されたルートの画像を与えてみたリと、より本物らしい日記を生成させるための実験を繰り返した。まだまだ精度は良くないが、なんとなく企画立案時に想像していたようなことができてきている……という実感が湧いてきた。

TMPRの実験室、一日目。会場であるエトワール海渡シヨールーム館の大きな窓に、サインを自主施工することから一日が始まった。公開制作という体で展示に参加しているので、このサインが展示しさを保つための要だ。施工が完了したら、その後はひたすらに会議と開発。まだタイトルも詳細も決まっていないCCBTでの展示に向けて、世界観やストーリーの構築、散歩ルートの生成方法やルートの検討、参加人数や体験時間などのオペレーション設計、ツールの設計など展示に関わるあらゆることを話し合い、どんどん決めていった。考えなければならぬことは山ほどあるが、CEETの会期中にテストプレイを行うために、まずは「体験できる」ところまで持っていかねければならない。終わりのない話し合いは日が暮れるまで続いた。

6: 会場構成

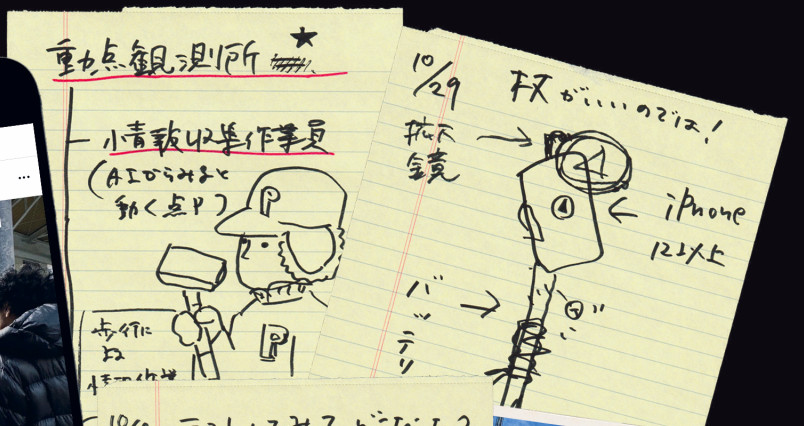


1: 全体の構成



四日目。前日に引き続き体験の流れを調整しながら、体験者がルートを決めるためのツールの設計やアプリの設計をつめていく。この日は夕方にCCBTの関係者が視察に来ることになっていたので、そこで現在の進捗を共有するための資料も同時に作成しながら、全くの白紙だった会場構成も、全体の流れが見えたことで決められるようになった。会場のどこに何を配置するかを決めることで、逆にオペレーションの内容が具体的に変わったもした。ここ数日ではっきりと実感したが、やはり集まって話し合わないと決まらないこと、見えてこないことがたくさんある。夕方の視察会(参加者が多くて実験室がぎゅうぎゅうになる)では、進捗を知って安心してもらうと共に、体験者の安全面への配慮や広報、企画面の決定など新たな課題が増えた。まだまだやることだらけだ。

三日目。一日目、二日目の怒涛の話し合いを経て(部屋がメモだらけになってきた) 今まで出てきたアイデアを整理しながら、コンセプトや体験の流れを一つにまとめていった。体験者にとっての流れと、裏で動いているシステムの流れをそれぞれ考えなければならぬので、まとめるのも一苦労だ。そして一つの流れにしても、足りないところも明らかになる。体験のために必要な機材や展示空間が検討できていないことに気づき、翌日の議題になったり、ツールのモックアップを作って検討することが必要だと気付いた。そうして話し合いをしている間にも、プログラム開発担当の堀川は前日までのアイデアをどんどん形にしていって、テストプレイにはルートを生成するプログラムと道案内をするアプリが必要なので、テストするために急いで開発を進めなければならぬのだ。



- 10/29 FXが...の212!
- 10/29 テストしてみてもういかに?
- 26分
 - 2人以上がい
景色がめろろ **3分
位まで!**
 - デバイス + つら がいい
距離をこぼれる
景色がめろろ → 212にさか
 - 様所歩道 7.11までキケン
 - 通りに道のクラマツク
どうする?
 - 地図 団全好き
 - 29-1 多々モ
たけビ バラバ

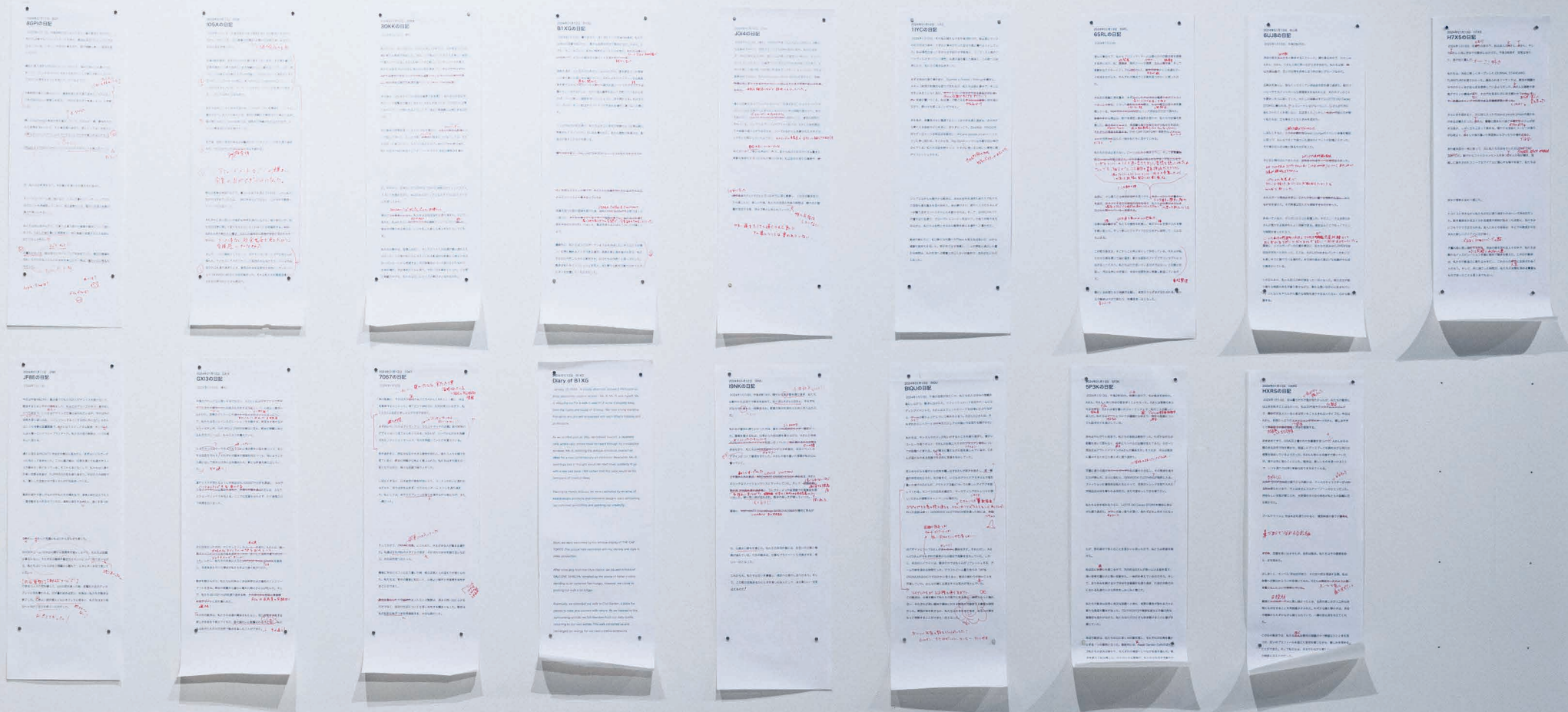


六日目。先日のテストプレイが成功に終わり、今後の課題ややるべきことが見え、一旦安心するともにとでも疲れていた。ということで、前々から作ろうと言っていたTMPRのチームユニフォームを作ることにした。その後はずっと行けていなかったCETの他の展示を見に行ったりと、小休止の一日だった。

七日目。芸術祭の最終日。アプリの実証実験を兼ねた二回目のテストプレイ。展示を見に来た飛び入りの参加者も含めて、改めて体験を確認した。自分たち以外の参加者も楽しそう、やはりこの体験設計は大丈夫そうだと確認できた。テストプレイにはカメラマンのただ氏も同行し、今後の広報活動で使う写真や、TMPRのプロフィール写真を撮ってもらった。長いようで短い七日間の実験室は、始める前は思いも得なかったほど大きな成果を得て、幕を閉じた。

五日目。ついに道案内アプリのプロトタイプができたので、念願のテストプレイを行う。展示会場を起点・終点とした徒歩約30分のコースを設定し、スマートフォンにダウンロードしたアプリでそのルートを限定的に表示する。途中までしか見えないルートをスマホで見ながらの歩き、自分達が設計した体験を初めて経験した。実際に体験してみても一番に感じたのは、「なんだかわからないけど、とても楽しい」ということだった。この体験は楽しいのか? ということがずっと気がかりだったので、ここで得た「楽しい」という感想はとても嬉しいものだった。そしてこの記憶が、最後まで私たちを励ましてくれることになるのだった……。はじめてのテストプレイの成功に興奮しながら、展示のタイトルも決まった。歩いている時のなんとも言えない感覚から、私たちはこれを「動点観測所」と名付けた。

日記のようなもの



作業員が動点観測所の観測ワークシヨップから戻って来ると、一枚のプリントが渡される。それは、AIによって生成された日記風の「観測レポート」。まるで一緒に歩いてきたかのようにもしくはほとんどもなくデタラメに。AIが綴った「三十分のまちあるきの記録」は、体験した人の目にどう写ったのだろうか。「このレポートを添削してください」と赤ペンを持たされ、自分の記憶を辿りながら、あーでもないこーでもないを前にして、自分のおぼろげな記憶とAIが描いた予測の間を右往左往する様子が赤字からも読み取れる。

2024年1月11日

今日は午後4時24分、働き盛りの私たち四人がオフィスを抜け出して、散歩するために早めの退社をした。私はこのグループの中で一番のおしゃべり好きで、いつもはデザインの仕事に追われているが、今日は外の空気を深く吸い込み、リフレッシュすることを目的に外に出た。Aさんはいつも冷静な図書館員で、Bさんはミステリアスな探偵、そしてCさんは人懐っこいイベントプランナーだ。私たちの協力関係は、いつも頼もしく思える。

遠くに見えるPRONTO 渋谷店を横目に見ながら、まずはシビルガーデンに向かって歩き出した。この公園の緑は、四季を通じて私達のオフィスの眺めの一部となっている。そこからほどなくして、私たちは人通りの多い交差点を抜け、FLIPPER'Sの前を通り過ぎた。平日のこの時間でも、凜とした空気の中で多くの人が行列を作っていた。

散歩の途中で涼しげななぜが私たちの頬をなで、身体に紛れ込んでもう一度活動する力を与えてくれた。真剣に話をするAさん、遠くを見つめる

るBさん、Cさんの笑顔に私は心から安らぎを感じた。

BOOKキューム NHK店の静かな雰囲気を感じながら、私たちは話題に事欠かない。それぞれの趣味や最近のイベントについて語り合いながら、私たちはいつもの日々の喧騒から離れて、エネルギーを取り戻していた。

【渋谷 藝術】「野々子チームJ」

行き交う人々の間を縫って、ichiの前を通った時、見慣れた店のディスプレイに目を奪われる。日が暮れ始める前に、何気ない私たちの散歩は終了した。心地よい疲労感とともにオフィスに戻ると、私たちはまた明日へと向けて活力を得ていたのだった。

おきこさん?!

2024年1月11日、午後4時20分。友人たちと一緒に散歩に出かけた。私たちは様々なバックグラウンドを持ち、普段は共同プロジェクトではたらい回しされている。しかし、今日は仕事を忘れ、街の喧騒と新しい発見を楽しむ日だ。

最初に通り過ぎたPRONTO。ここではよく、疲れた時に立ち寄って心をリフレッシュさせていた。Aさんはあのカフェが絶えず新しい人とのつながりを提供することを気に入っているようだ。

中華料理の香りに誘われつつ、陳家私菜の前を通り過ぎた。Aさんはいつもの自分らしい冒険心を見せ、「次回はあの店で食事しよう」と提案した。

遠くにSupremeの看板が見え隠れしていた。Bさんが一瞬、興味を引かれた表情を浮かべたが、その場を通り過ぎた。彼にとっては、衣服よりも昔ながらのビデオゲームやプログラミングの方が魅力的なのだろう。

FREAK'S STOREには色とりどりのアウトドアウェアが飾られていた

が、私たちは約束を守り、その魅力を遠くから眺めるに留めた。

タリーズコーヒーに差し掛かると、Cさんが優れたリーダーシップで今日のルートを再確認してくれた。彼の姿勢からは、細かい計画と判断の速さを感じられる。

私たちは共に歩みながら、仕事とは違う個々の資質や趣味について語り合った。Dさんの落ち着いた雰囲気と、時に素敵な言葉を交えた会話にはいつも心が和む。

夕暮れが近づき、街は徐々にライトアップを始めていた。毎日の喧騒を忘れ、ただただ友人たちとの歩みを楽しんだ一時は、確かに心に残るものだった。

Apple Storeは? ねこは? がたがたは?

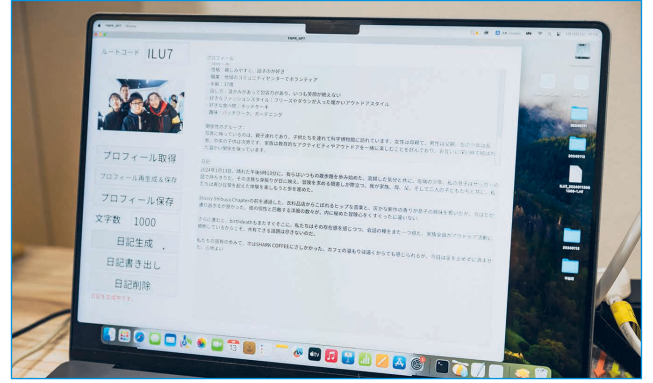
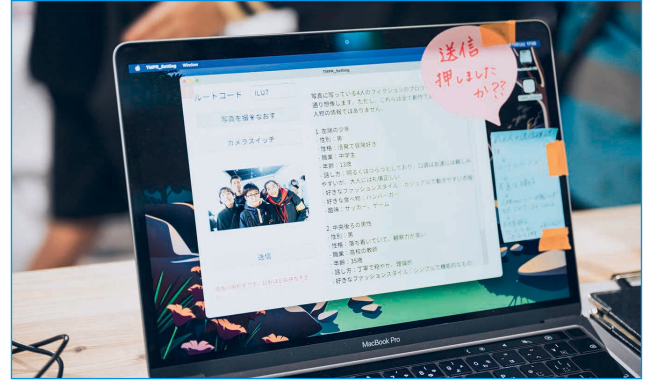
添削された日記

1. ルート選択マシンを使って観測ルートを設定する。観測ルートが決まると、ルートに紐づいた4桁のルートコードが生成される。

2. 作業員の写真を撮る。撮った写真はAIによって分析され、一瞬にして日記の登場人物としてのプロフィールが生成される。

3. ルートコードとプロフィールが揃ったら、準備完了。(日記は人物のプロフィールとルートコードに紐づいたルート情報から生成される。)

4. 日記生成用パソコンにルートコードを入力すると、瞬時に日記が生成される。生成された日記を書き出し、プリンターで印刷すれば完成だ。



日記生成の裏側

JOI4の日記

2024年1月12日、晴れ。この日の午後、私とAさんとBさんとで静かなる散歩を始めた。時間はちょうど15時を過ぎた頃だ。私たちはまず、渋谷の街を歩き始め、柔らかな日差しが適度に心地よい。モスバーガーにさしかかると、公園通りのわずかなざわめきが聞こえてきた。Aさんが新しい食べ物への好奇心を掻き立てられているようだが、今日は食事目前ではない。BさんはAmazon Music Studioを眺めると、**知的好奇心をくすぐられるかのように、しばし立ち止まり音楽の話に花を咲かせた。地図を確認しながら路地へ入っていた。**

僅かな距離を歩きブルーボトルコーヒーを過ぎると、ショウウィンドウの中からこぼれる種やかな香りに、私の中の日常の喧騒が癒された。散歩を続けると、**ダヌンベの流氷カフェ**と**LOTTE DO Gaeao STORE**も視界に入り、優雅な時間が流れている。ピルグリム サーフ+サブライの前では、Bさんの美術館巡りの話題で盛り上がりながらも、シンプルながらも洗練されたスタイルにAさんも感心していたようだ。**スラランビル東急点2 GPS に記録された**
普段は目に入らないうる
まだまだ歩く。静かな渋谷の一角で、変わらぬ日々の中で小さな驚きと新鮮な気持ちを見つけられた感じがする。私は自分の周りの環境や、家

今日もリ合した

族であるAさんとBさんとのつながりに深く感謝し、この日の散歩を心から楽しんだ。美しい午後、私たちの交流と内省の時間は、静けさと喧騒が混在する街、渋谷で静かに彩られていった。

特に反省はしていない...

せまい道をたくさん通らされた感じにその華々しいは書かれていない。

I9NKの日記

2024年1月12日、午後4時14分。穏やかな風が街を通り過ぎ、私たちは軽やかな足取りで散歩を始めた。私と共にAさんとBさん、それぞれが日々の仕事から一時解放され、新春の気分を味わうために外へ出たのだ。

私たちが最初に通りにかかったのは、賑わうHUB渋谷センター街店だった。冒険を愛する私は、日常からの脱出感を覚えながら、Aさんと**次々新しいパンケーキについて**のプロジェクトのアイデアを話し合っていた。風に揺れる木々の間を歩きながら、私たちは**IKEA渋谷のインテリア**を眺め、次のイベントのデザインについて意見を交わした。Aさんの落ち着いた提案が私の心に響いていく。

OK!

最後に、**新しくオープンした LOUIS VUITTON** 足を踏み入れた靴店、**ABC-MART GRAND STAGE** 渋谷店は、Bさんのシックなファッションセンスとマッチしていた。そして、**評価の高い激安は隈島** 銀ヶ苑 渋谷店を通り過ぎると、3人でラーメンや居酒屋での食事会を思いついた。軽い笑い声が交わされ、散歩の楽しさが増していった。

最後に、**ABC-MART GrandStage SHIBUYA109店**を横目に見ながら **SHOQUN BURGER**

ら、心地よい疲れを感じた。私たちの共同作業には、お互いの才能と情熱が溢れている。今日の散歩は、仕事もプライベートも充実させる、美しい一日となった。

これからも、私たちは互いを尊重し、成功へと協力し合おうだろう。そして、この街の活気あるひとときを楽しみ友人として、また新しい一日を迎えるのだ!

小田和正 さん!!

Flippers

風に揺れる木々の間を

ビル間

ボタリ

新しくオープンした LOUIS VUITTON

信じられはほど

評価の高い

激安は隈島

店

その通り!!

GXI3の日記

2024年1月12日、晴れ。

午後のやわらかな日差しを浴びながら、Aさんと私は**グラフィックデザイン**と**文化人類学**への知的探求を共有する旧友として、心地よい散歩に出かけた。街角のディテールや通りかかる人々のファッションについて、私たちは互いにインスピレーションを交換する。街並みを眺めながらふと足を止め、SHE WOLF DINERを横目に見る。都会の喧騒に溶け込むそのフレームに、私はカメラを構えていた。

ルタランブスターや**タバス&タバス**に通る都市の風を感じつつ、私たちは会話を交わす。「それぞれが趣味の領域を持ちつつも、時にはそこから抜け出して相手の世界に足を踏み入れ、新たな刺激を探り出している。」 **その通り!**

道行く人々が流れるように衣料品店BLAXSMITHの前を通過し、シンプルながら**ハートのデザイン**を見つけた。心なファッションに惹かれる私と、快適な衣類を選ぶAさんは、ふらりとショーウィンドウを見入る。ここでは言葉を交わさず、ただ表情だけで共感を伝え合った。

次に目を引いたのが、ケニヤンカフェのコーヒーの香り。Aさんは、抹茶スイーツという日本の味を求めていたが、あいにく抹茶の香りはなかった。しかし、私たちのお気に入りの**VINTAGE SHOP GRACE**を発見し、古き良きものへの嗜好が私たちをより強く結びつけた。

散歩を続けながら、私たちは何気なく渋谷神南北谷公園前のファミリーマートを見る。都会の喧騒から僅かに離れた静けさに心が和んだ。そして、私たちはLUSH HUBを通り過ぎる際、その現代的な空間と清潔感あるデザインに目を奪われた。

「その日の散歩は、私たちの共通の興味をもたらし、同じ空間を共有する楽しさを改めて教えてくれた。街の賑わいに影響されることなく、私たちは自分たちだけの世界で散歩を楽しむことができた。」 **その通り!**

和茶

TA

Azuは武蔵美の同級生!

COE

B1XGの日記

2024年1月12日、曇り空の下、ぼかぼかとした午後2時過ぎ。私たちは渋谷の喧騒を抜け出し、静かな時間を求めて散歩に出た。Aさん、Bさん、そして私Cさん、創作に情熱を注ぐ3人の女性だ。私たちは長い付き合いで、お互いの趣味や仕事のことを良く知っている。

路地を過ぎ、ふと見かけた和カフエyusoshiでは、透き通るような窓越しに落ち着いた話し声が漏れていた。Aさんはそのアンティークな雰囲気や愛でながら、現代アートの新しい展示企画についてのアイデアを披露した。一方のBさんは、次の小説の着想を巡って沈黙しているかと思えば、ふいに新しい展開を思いついたように、目を輝かせる。私はそのテーブルが、きっと創造的なアイデアが生まれる場所に違いないと感じた。

ハンズ渋谷店の前を通り、私たちはそこにある万華鏡のような商品群と革新的なデザインのグッズに目を奪われた。各々の感性が刺激され、創造力が湧き上がるのを感じる。

僅かな時を経て、THE CAP TOKYOのウィンドウが私たちを迎え入れ

る。独特なデザインの帽子が、私Cさんの映像制作におけるスタイルやアイデンティティと響き合っていた。

ZEBRA Coffee & Croissant 見渡す限りの街の喧騒を抜けた後、BALGONE SHIBUYAの前でほっと一息つく。そこから漂ってくるイタリア料理の香りに、私たちはお腹を空かせることにした。とはいえ、散歩を終えるのはもう少しだけ後しよう。

最終的に、私たちはシビルガーデンまで足を伸ばした。そこは人々が憩い、自然に触れることができる場所。周囲の音に耳を傾けながら、私たちは日々の忙しなさを解放され、自分たちの世界へと戻って行った。散歩は私たちにリフレッシュを与え、また新たな創作活動へ向かうエネルギーを充電してくれたのだった。

3人は今日が初対面で紹介した。

過去に聞いた

話

? 通ってない

その通り!

◎

HXRSの日記

雨が降る
降る

2024年1月13日、空は曇りがちで風が冷たかったが、私たちの散歩には止めを刺すことはなかった。私は30代後半のシステムエンジニアで、静かだが友人といるときは笑いをこらえきれないタイプだ。今日はAさん、自信たっぷりのファッションデザイナーとBさん、親しみやすくして世話焼きの高校教師と渋谷を散策する。

?

歩き始めてすぐ、GRACEと書かれた古書屋を見つけた。Aさんはその趣のある店先で目を輝かせ、窓越しにディスプレイを眺めながら流行の感覚を吸収しているようだった。Bさんも気になる様子で覗いていたが、我々は先に進むことにした。散歩は、新しいものを見つけることで、いつも通りの日常に新鮮な彩りを与えてくれる。

PARCO

= 色々な

JUMP SHOP渋谷店の賑やかな外観には、アニメのキャラクターがいたる所に飾られており、そこはまさにカルチャーゾーンのひとつだった。渋谷らしい活気が感じられ、未評価のその店の特色が私たちの話題に花を咲かせた。

ゴールドラッシュ 渋谷本店を通りかかると、韓国料理の香りが鼻を

鼻づまりで分からなかった

すべり、空腹を思い出させたが、目的は散歩。私たちはその誘惑を抑え、足を進めた。

少し歩くと、モンベル 渋谷店があり、その店の前を通過する際、私は防寒への関心からつい中を覗いてみた。Bさんは歴史の一片のように語る着こなしについて微笑んでいた。

区役所

最後にシビルガーデンに差し掛かったとき、自然の美しさが人工的な空間にも存在することを再認識させられた。わずかな緑と静けさは、渋谷の喧嘩からわずかながら隔てられていて、一瞬の安らぎを与えてくれた。

この日の散歩では、私たち三人は都市の喧嘩の中で静謐なひとときを見つけ、互いのプロフィールを超えた息吹を感じながら、親しみを深めることができた。そして私たちは、ささやかながら新たなページを私たちの物語に加えたのだった。

BIQUの日記

2024年1月13日、午後の空気が冷たい中、私たち四人は渋谷の喧嘩を背にしなが、散歩に出かけた。リフレッシュという名目のチームビルディングイベントだ。Aさんはスウェットのフードを目深にかぶりながら、ゲームの新トレンドについて熱弁をふるう。BさんとCさんは、それぞれのスニーカーとビジネスカジュアルの装いで足取りも軽やかに。

私たちは、サンマルクカフェの匂いがするところを通り過ぎた。暖かいコーヒーの香りがふと、Bさんのお気に入りのベジタリアン寿司について話題へと変わる。私が寒さに震えながら話を楽しんでいる中、Cさんが温かみのある笑顔で社交的に言葉を交わしていた。

控えめながらも穏やかな空気を醸し出すBさんが前方を指さし、座・撤櫃の存在を知らせた。その後すぐ、いつものアウトドアスタイルで落ち着いた様子のDさんが、アウトドア活動についての新しいアイデアを話してくれる。モンベルの店先を横切り、マーケティングのトレンドに詳しいCさんが最新のキャンペーンに触れた。

ポテトチップス屋の軽道と。Aさん(=HY)はスニーカーと。LTOP

四人の会話は続く。GEKIROCK CLOTHINGの前を通った時には、洋服

赤瀬川原平の
ファッションは、
* 深い(周)のT2ニヤ屋と...

がっつり!

のデザインについてBさんがほんの少し興味を示す。それに対し、AさんとDさんがそれぞれの業界からの視点で見解を交わしていた。しかし、本日のハイライトは、散歩だけではなく心がリフレッシュする、チームの絆を深める時間だった。クラフトビール量り売りの TAP&CROWLER店の灯りがほのかに見えると、散歩の終わりが近いことを示唆していた。みんなの顔には満足そうな笑みが浮かんでいた。

この散歩は、仕事を離れて私たちの周りにある美しい瞬間ともっと触れ合い、それぞれが深い趣味や興味に対する情熱を再確認する貴重な時間だった。寒風が体を刺すなか、私たちは生き生きと歩き、お互いの事をもっと理解することができた一日となった。

おいしいお茶の話をしたい!
ホリエモン、1777セーラー、コーヒー、T2ニヤ屋。

65RLの日記

2024年1月13日

澄んだ青空の下、私たちプロジェクトチームは都心の中の散歩路を探索する旅に出た。私、建築家、現代アートの画家、文化人類学者、そして革新的なITスタートアップのCEOの4人。都市再開発という共通のテーマを持ちながらも、それぞれの視点でこの街を見つめたいと思ったのだ。

渋谷区の喧嘩に身を置き、まず目にしたのは渋谷公園通り店のファミリーマートである。こうした便利な小さな箱は、もはや都市の在り方を象徴している。PORTER-EXCHANGEとハンズ渋谷店がやがて現れた。後者の多彩な商品は、街の多様性と創造性を思わせ、私たちの討議を刺激した。挽き肉のトリコは、多国籍な香りを放ちながら私たちを迎え、それぞれの胃袋を刺激する。THE CAP TOKYOが、革新的なファッションの世界からほんの一端を私たちに見せてくれる。

私たちの足は止まらない。ローソンとたこ焼き子やじ、そして家電量販店のn-hamaを駆け抜けた。けやき薬局の控えめな佇まいが私たちを

とっぴんさん(=A)さんが思いついたように言葉を話してくれただけで、祖父が「こころの健康の専門家だ」といって、彼のファミリーにメンバー一同は大変驚いた。この話は親戚の割合により受け取り、

ニニ大新の碑

ながし、少し速くには渋谷区役所を見つけた。市民一人ひとりの暮らしを支え、守ろうとする公共施設の存在を見て、私たちの仕事がいかにその場に同じでも時間の流れが違っていることを実感する。

沿道の溢る芸術は、私たちの感性を刺激し、街がアートを受け入れる様を感じ取った。そして新しいアイデアのひらめきに期待して、ふと立ち止まる。

この街の息吹は、そこかしこに色と形として存在している。それらが私たちの五感を通じて脳に届き、新たな設計のアイデアやコンセプトにつながるだろう。私たちはただ歩いているだけではない。この街と対話し、内なる声に耳を傾け、未来の空間を共に想像し創造しているのだ。

重結整理

隣にいる仲間たちの視線が交錯し、肯定のうなずきと交わされる。私たちの散歩はやがて終わり、収穫多き一日となった。

6UJ8の日記

2024年1月13日、午後2時25分。

渋谷の街を友人たちと散歩することにした。晴れ渡る空の下、わたしはAさん、Bさん、Cさんと共に笑いながら歩き始めた。私たちは皆、同じ大学出身で、互いの日常を共有し合う仲の良いグループなのだ。

出発点を後にし、程なくしてケニヤン渋谷店の前を通り過ぎた。朝のコーヒーやそのアットホームな雰囲気を知るAさんは、そのカフェのことを愛おしそうに話していた。わたしの視線はすぐにLOTTE DO Cacao STOREに奪われる。(チョコレートに目がないらしく、Cさんが行列に並んでいたことを思い出し、ほほ笑んだ。)しかし、出会いの話に花が咲く私たちは、立ち寄ることなく歩みを進めた。

しばらくすると、とりわけ静かなGreen Loungeのイベント会場を横目に見つつ、みんなでそこで過ごした過去のイベントの記憶にふけた。その場の安らぎは胸に残るものがあった。

次に目に飛び込んできたのは、活気あふれるモンベル渋谷店であった。

昇降機で10分(1000円)に7分20秒で、全員が興味を覚めた。

パルコの交差点で、タケノコが降った。おじいさんが「おじいさんが降った」といって、みんなで大騒ぎした。

このスポーツ用品店を前に、Cさんの登山に纏わる情熱的な話に、みんなが耳を傾けた。その熱意はなんとも感染するものがあった。

あるいていると、ザリガニカフェに到着した。そのユニークな名前にBさんが惹かれる気持ちもよく理解できる。彼女ならここでゆっくりとした時間を楽しむだろう。

最後に、シビルガーデンの公園を横目に、私たちの歩みはFLIPPER'S渋谷店の方向へと向かった。ここは、Aさんが大好きなパンケーキをいつも楽しそうに食べている場所だ。あの時の彼女の満足げな笑顔が今も目に焼き付いている。

この日もまた、私たち四人の絆が深まった一日となった。街の生活が紡ぐ様々な物語の糸を手繰り寄せながら、新たな思い出が心に刻まれていく。こんなに平凡ながら豊かな時間を過ごせる友人たちに、心から感謝する。

2024年1月16日

今日、私とAさんは13時19分、久しぶりの散歩に出かけた。^{強い寒風}心地よい冬の日差しを浴びながら、我々は出発点を後にし、渋谷の街を闊歩した。先ず目に飛び込んできたのは、RAGEBLUE 渋谷であった。店先には冬物のセールを告げるバナーが風にたなびいていた。

少し歩くと、Guzman y Gomez - Shibuyaの香ばしいスパイスの香りが、通りを行く皆の鼻をくすぐっていた。Aさんはその匂いに誘われるように立ち止まり、地中海料理を超えるメキシコ料理の魅力について、^{定評も高い}私に情熱的に語りかけた。私たちは魅力的な店を後にし、さらに先を目指した。

旅の途中、私達はタワーレコード 渋谷店を横目に見つつ、^{過去の就いた}音楽の話に花を咲かせた。私は水彩で表現できない音楽の色彩を、想像しながら歩き続けた。

西武渋谷店 モヴィーダ館の前を通りかかると、Aさんはそこで行われる

ことのある都市計画に関するイベントの話で目を輝かせた。彼女のエコライフへの情熱が、街に溶け込んでいるのだとあらためて感じた。

Ray-Banの店舗に到達したとき、^私私たちはお互いにヴィンテージ好みのスタイルについて語り合った。この日の青空のように晴れやかな気持ちで、私たちは歩き続けた。

やがて、渋谷区役所の近くに差し掛かり、^{日常の忙しなさから少し離れた}時間のありがたさを感じた。街の駆け足とはうらはらに、私たちの時間だけがゆっくりと流れていたような気がした。無数の人々の会話の波と共に、私たちはさらなる景色を求めて歩みを進めた。その日見た街の姿は、私たちの心に新たな色彩を添えてくれた。

AIは人の心をどうやって理解する
人間とどう交わるべきか

2024年1月16日

2024年1月16日、夕暮れ時の散歩が始まった。私とAさん、Bさんは会社を後にし、渋谷の街を歩き始めた。真面目なAさんはさすがのグラフィックデザイナー、彼女の目は色彩豊かな広告に引きつけられていた。一方で、^{いざ}集積された本の宝庫が待ち受けるどこかの図書館を思い描いているのか、^{YES!}Bさんの眼差しは温かく、何か言葉を交わすごとにほほ笑みが浮かんでいた。そして、私はすべての景色を内省的な思考と共にゆっくりと看取る。

街は冷え込んでいたが、ルークス ラプスターの前を通りかかると、^店から漂う温もりに心が温まった。ちょうど渋谷東武ホテルのPRONTOの傍を通った時、話題の新刊を扱うであろうBookキュームが存在感を放っていたが、リニューアルのためか灯りは消えており、その静けさが夕暮れの風に溶け込んでいた。

しばらくの間、様々な店舗やサロン、オフィスが並ぶ通りを歩いていたが、私たちの目的はラックスすること。56 Tattooの斬新なデザインが目を引く店舗へ、^{電気がないです}美容鍼サロンAcuvieの洗練された入口は、まるで私たちをリフレッシュへと誘うかのようだった。

しかし、私たちは渋谷区役所の機能性と静謐さが感じられる佇まいに、一瞬心を奪われながらも、その日はただ歩くことを選んだ。同僚たちと共に時を重ね、^{仕事も私生活も分かち合ってきた}私たちは、このようなささやかな散歩でさえも意味を成す。ワインの酒場 ^{はじまりの3人組}ディブントを横目に ^心に見ながら、^{一体感}交わされる言葉はいつものように心地よい。

夜空に星が現れ始める頃、^{400!!}私たちは日常をほんの少し忘れることができた。街の光、幸せな騒音、寒さと戯れながら、私たちの心は微かに揺れ動き、それがまた新たな一日への活力となるのだ。

2024年1月16日

2024年1月16日、午後5時12分、陽気で家族思いの私は息子であり学生のアさんと共に散歩に出かけた。父として息子との時間は貴重であり、平穩なこの日の僅かな日差しの中を歩くことは、単なるリフレッシュを超えた、^ハ二人の絆を深める大切な瞬間だった。

私たちは渋谷を訪れ、通りに沿って歩き始めた。まず目に飛び込んできたのが、^{B2nd}Supremeの派手な看板だ。評価は芳しくなかったが、彼ら独自のファッションスタイルを見るのはいつも面白い。だが今日私たちの目的は違った。息子への新しいスポーツウェアの購入ではなく、^心心地よい風に誘われた父子の時間を重視したかった。

私たちはモンベルの前を通り過ぎると、その評価の高さに納得がいった。私は休日にスポーツスタイルが好きで、今日はウインドウショッピングにとどめておき、息子との会話を楽しんだ。私の趣味である写真撮影に息子が興味を持った時など、内心で小さな喜びが湧き上がった。

散歩を続け、²⁷⁰Green Loungeの横を通り過ぎる。そこはイベント会場で、~~以前ここで開催されたテクノロジーの展示会には、知識欲と好奇心~~

が旺盛な息子を連れて挑戦したことがある。そのたびに、息子の新鮮な視点と質問に私も新たな発見をしたものだ。

途中、心地よい香りを放つT4 KITCHENの近くを素通りすると、ちょうど夕方の食事時を迎えようとしていた。家族思いの私としては、^{自宅}自宅で夕食が待っているからと、^AAさんに微笑みながらそこを離れた。

その後も話をしながら歩き、^{Rock ON}MARGARET HOWELLの洗練された外観を眺めた。私たちの散歩では買い物の予定はなかったものの、この街の多様性を垣間見ることができた。

家に戻る頃には、満足感でいっぱいだった。渋谷の街をぶらぶらと歩き、今日一日を息子と共に過ごせたこと、そして何より彼との会話を楽しむことができたことに心から感謝した。散歩は私たちの知識を広げ、関係を育むのに最適な時間だ。そして今日もまた、そんな時間を大切に過ごすことができた。

2024年1月16日

2024年1月16日、空はくすんだ色をしていたが、気温は温暖で、散歩にはちょうど良い日和だった。私とAさんは、午後1時過ぎにいつもの場所で会い、我々が愛してやまない街の路を歩き始めた。

今日の私たちのルートはいつもと少し違っていた。渋谷藝術に寄り道しようと思っていたが、Aさんの提案で今日は通り過ぎるだけにした。ガラス越しに見えるアート作品は、彼女の静かな眼差しを引きつけ、一瞬立ち止まるAさんの姿があり、いつもと違う風景が広がっていた。

次に私たちの目の前に現れたのが、^{PARCO}MARUKO 渋谷店だ。この衣料品店のショーウィンドウは定期的に変わるが、今日は特に色鮮やかなディスプレイで目を楽しませてくれた。Aさんはそれにはほとんど興味を示さず、ただ静かに横を通り過ぎた。この管見草履用が欲しいと言っていた。

折り返し地点近くのThe Millennials 渋谷の前を通ると、私はちょっと目が覚めるような感じがした。世界中から若者が集う、その活気ある空間は私たちにも似ている。旅と交流が重なり合う場所、私たちはその中を歩く。

帰路に差し掛かる頃、^{本館}ランニングウェアに身を包んだジョーガーが、^モモンベル 渋谷店の前を走り抜けていった。私は冒険心をくすぐられ、Aさんは静かに息を吸い込んでいた。

最後にRhythm Cafeを通りかかると、淹れたてのコーヒーの誘惑が私たちを試したが、今日は心を強く持ち、ただ散歩の終わりを感じながら歩を進めた。この街の一日一日が、私たちのブログに新しいストーリーを紡ぐ。そして今日も、私たちはまた、新しい記憶を分け合ったのだ。

2024年1月17日、午後3時12分、渋谷にて。

柔らかな冬の日差しを浴びながら、Aさんと散歩に出かけた。Aさんは、いつも通りの陽気さを湛えて、カジュアルな服装に個性的なメガネを合わせている。その隣には、いつも落ち着いた雰囲気のあるBさんがスマートカジュアルな装いで、カメラを首から下げていた。

私たちの足取りは軽く、渋谷の喧騒を横目にはなまるうどんの店前を通り過ぎた。その温もりある灯りと匂いが漂う中で、Aさんはふと「今度、寿司屋でも行こうか」と提案してくれる。誘われるままに、Royal Garden Cafeの前を通り、Aさんは自分の開発したアプリのアップデートについて語り始めた。彼が持つプロジェクトに対する期待と情熱がまるで新しいガジェットを手に入れた子供のように、私も笑顔になる。

渋谷地方合同庁舎を過ぎ、近代的な景観の中、ユーロスポーツの店先では、Aさんが欲しがっていた新しいランニングシューズを目にした。彼は「次のマラソンでこれを履いていくんだ」と目を輝かせる。

宇田川カフェ本店の近くを通り、ふとカフェラテの香りに胸がほころりする。Bさんは写真撮影の話で目を輝かせ、「この辺りの光が絶妙なんだよね」とシャッターを切る。彼の穏やかな性格が、安心感を与えてくれている。

そして、Ray-Banの店を横目に見つつ、今日の散歩が私たちにとって、日常のストレスから解放される時間になることを実感する。AさんとBさんの共通の興味とそれぞれの個性が織り成すこの友情は、私にとっても掛け替えのないものだ。

太陽が西に傾き始めた頃、私たちは足早に帰路についた。この散歩路で感じたさまざまな風景や会話が、また一つ、私たちの友情を深めていくのだろう。

- AIにかたどるとして、神社に寄った
- ママが歩道と車道がどう違うか
- おと話をした。
- 30分以上かかった。50分くらい
- AIがそれをどう感じるかはどうしたかどうかが重要
- ルートが正しいのか悪いのかどうかが重要

2024年1月17日、午後5時25分、私とAさんはこの街を散歩することにした。何気ない散歩だが、私たち二人にとってはいつもの風景さえも新鮮な発見に満ちている。好奇心旺盛な私たちは、デザイン展示会での出会い以来、共通の興味を持つ仲良しの友人となり、今もその絆を深めている。

曇り空を見上げながら歩きはじめた私たちは、まずハンズ渋谷店を通り過ぎた。私のガジェット好きの心をくすぐる場所だが、今日は足を止めることなく進んだ。その後、n-hamaという家電量販店を横目に、私たちは語らいながら歩き続けた。この店は評価がないことから、まだ新しく、私の中の探究心を刺激する。

散歩は心地よいもので、次第に裏 渋谷店というラーメン屋の前を通り過ぎた。Aさんのラーメン好きを思い出し、私たちは笑顔を交わした。すぐ隣では、モンベル 渋谷店がアウトドア好きの熱い視線を集めている。そんな中でも私たちは軽やかに歩みを進めた。

はなまるうどん 渋谷公園通り店の和やかな香りがふわりと漂ってきた

が、今日の私たちの目的は食べることではなく、街を感じることに。そして、STUDIOUS TOKYO 神南店が示すこだわりのファッションと、デザインを彩るAさんのスタイルを脳裏に描きながら、私たちは最後の目印、LUKE'S LOBSTER 渋谷ParkStreet店をわずかに見つめるだけで足早に過ぎた。

この街のざわめきに心奪われながら、私たちはたくさんの刺激を受け、いつの間にか会話も弾み、創造的なアイデアで満たされていった。散歩はやがて終わりを告げるが、私たち二人の交流はこれからも続いていく。街が与えてくれたのは、ただの風景ではなく、二人の友情を育てる貴重な時間だった。

- AIにイメージをきかせ、そのイメージをどう表現するか
- 最後まで7分くらい
- 狭い道を通過した時に、とれどきどきした
- 何となく、何かを感じた
- 地元の人の生活は、何となく、何かを感じた

On January 17, in the gentle afternoon light, I began my walk with a friend, A, whose two worlds intersect. We each collaborate in the realms of graphic design and event planning as we continue to nurture our creativity.

On our walk, we passed a Denny's. Nearby is Shibuya Park Avenue. Nearby is Shibuya Park Avenue, a green pathway that offers a little respite from the hustle and bustle of the city. We passed by it unattended, but the aromas of various foods wafted in from the surrounding area.

Later, as we made our way through the crowds, we took a side trip to the Eurosport Shibuya store, a sporting goods store. Its show window was lined with eye-catching sneakers and training wear, and Ms. A stopped for a moment to look at them. She has recently become more interested in physical activity as well as visiting art galleries. and she has a lot of knowledge about it.

During our walk together, we passed by the Freak's Store Shibuya. I wondered if the store had influenced her flamboyant fashion sense. Not many people look as good in bright, colorful outfits as she does.

Finally, we passed Flipper's Shibuya, known for its sophisticated lobster rolls. Remembering my preference for avocado toast, I suddenly thought about having a meal, but prioritized the walk. Instead, a pleasant winter breeze blew by with clouds traveling in the sky above us. Its quiet graceful flow seemed to spread through our hearts.

It was a creative walk that day. By looking at the facades of the buildings and observing their lines, shapes, and textures, I was able to renew my design inspiration. Above all, we felt again that day that we were bound together by a bond that was different from our work.

1月17日、午後の穏やかな光の中で、私は二つの世界が交差する友人、Aさんと共に散歩を始めた。私たちは各々、グラフィックデザインとイベントプランニングの領域で協力しながら、クリエイティブを育む歩みを続けている。

散歩の道すがら、私たちはデニーズを通り過ぎた。その近くには渋谷公園通りがあり、都会の喧騒を少しでも癒せるような緑の小道が広がっている。私たちは素通りしたが、周囲からは様々な食の香りが漂ってくる。

その後、人込みの中を抜けながら、スポーツ用品店であるユーロスポーツ 渋谷店を横目に見た。そのショーウィンドウには目をひくスニーカーやトレーニングウェアが並べられており、Aさんは少し立ち止まりそれを眺めていた。彼女は最近、アートギャラリーの訪問だけでなく、体を動かす活動にも関心を持つようになっている。

共に歩む間、私たちはFREAK'S STORE 渋谷店の前を通り過ぎた。彼女の華やかなファッションセンスがこの店から影響を受けているのだ

うかと私はふと思った。彼女のように明るく、色とりどりの装いが似合う人はそういない。

最後に、私たちは洗練されたパンケーキで知られるFLIPPER'S 渋谷店の前を通り過ぎた。私の好みのアボカドトーストを思い出して、ふと食事をするのを考えたが、散歩を優先した。代わりに、心地よい冬の風が、私たちの頭上の空を旅する雲と共に吹き抜けていった。その静かな優雅な流れが、私たちの心の中にも広がっていくようであった。

この日は、創造性に富む散歩だった。建物のファサードに目を向け、その線や形、質感を観察することで、私のデザインに対するインスピレーションを新たにした。Aさんと私は、私たちの専門分野を超えて、都市の散歩を通して互いの視点を広げることができた。そして何より、私たちはこの日もまた、仕事とは異なる絆で結ばれていると感じたのだ。

同時に、壁面にうつるビルとの多様な印象的だった！建物全体をひきいて、目線の高さで近距離感を感じた。

B1B4の日記

2024年1月18日、午後4時8分。僕とAさんは、渋谷の街を散策することにした。黄昏時の空気はひんやりとし、遠くのパルから漏れる温かな光が道を照らしていた。Aさんは、芸術が光り輝くようなカラフルなアウターを羽織っており、その姿はまるで画家がキャンバスに色を置くようだった。

私たちの心地よい沈黙を守りながら、私たちは街の喧騒を背景にした自然なリズムで歩き続けた。途中、FREAK'S STOREの近くを通りかかり、Aさんが目をキラキラと輝かせながら陳列されている洋服を眺めたのを覚えている。彼女はいつも、細やかで実用的なファッションを好む傾向があるが、新しいデザインや芸術的な要素に対する興味は私よりも強いかもしれない。

FREAK'S STORE から離れ、更に歩を進めると、街並みの変わりように思わず言葉を交わした。ビルとビルの上に挟まれた空の切れ間から、細やかな光が伸びている。夕日はもう見えないが、その余韻を感じながら歩くことは、日々の作品制作で求めるインスピレーションの合間の小休止のようだった。

駅周辺のまわりには公共の施設が多いことに気づいた。NHK 横の建設現場の話題が豪華だ!

散策を終え、渋谷の交差点を渡るとき、私たちは互いに異なる分野の知識や経験から話が広がり、いつしか共同のプロジェクトについて意気投合していた。そんな師弟関係かつ父娘のような私たちにとって、この街の小さな発見こそが、次なるクリエイティブへの糧となるのだろう。今日のこの穏やかな時刻は、私たちのこれからの創作活動にきっと大きな光となるに違いない。

KJ4Fの日記

2024年1月18日、午後のやわらかな日差しが窓辺を包んでいた。彼女と私、大学時代のルームメイトで現在も親友である二人は、渋谷の街を散策することにした。私たちは、美術館やギャラリーを巡るのが好きなのだ。

彼女のカジュアルなアウトドアウェアが映える中、私はスマートカジュアルな格好で心地よい風に吹かれながら歩き始めた。途中、まだらけ渋谷店の賑やかな雰囲気や心が弾んだ。彼女はいつものように明るく、「ここに来ると懐かしいものが見つかるかもね」と期待に満ちた声をあげた。

私たちが次に通りかかったのは、静かなオーラを放つ渋谷地方合同庁舎だった。彼女と私は、それぞれのキャリアについて話をしながら、そこを過ぎた。

さらに歩を進めると、地鶏軍鶏 兼子のあたりでおいしい匂いが漂ってきた。私たちは、今夜の夕食に海鮮丼でもどうかと提案し合い、心の中でメニューをイメージした。

その後、ユーロスポーツ 渋谷店の前を通り、彼女はハイキング用の新しいギアを見てみたいと軽くつぶやいた。私はプロジェクトの計画通りに進んでいないことに頭を悩ます一方、彼女の新しいアイデアに救われることもあった。

最後に、私たちはAmazon Music Studio Tokyoを横目に見ながら、近い将来新しい音楽を探知する時間を共に持つことを願った。支え合い、尊敬しあう友情は私たちの散歩を特別なものにしてくれる。

この街の賑やかさと静けさ、そしてそれを隣で共有する親友の存在が、この日の散歩を忘れがたいものにした。私たちは互いの生活に刺激を与え、また互いの思考に影響を受けながら、この豊かな時間を過ごしている。そして私たちの散歩は、晴れた午後の渋谷でゆっくりと日を追いかけながら続いていった。

ふたつと別れ、歩かない渋谷の路地も歩いて、
4つと別れ、お店やカフェが「これ」だった。
思えば「ゲゲゲの野郎」が「アツシ」(ニ)に「C」を「アツシ」。
「期待」「明日」「それやから」... どの「アツシ」も「会話」は「アツシ」。

25SFの日記

2024年1月18日、曇り空の下で始まった私たちの午後の散歩。私は、旅行作家としての新たな素材を探し、心の中に刺激を求める。一方、Aさんは、静かながらも美を追求するデザイナーの目で非日常を捉えたいと願っている。共にアウトドアへの情熱を持つ私たちが、都会の喧騒の中にもその片鱗を見出す。

まずは、渋谷年金事務所のあたりを通り抜け、ザワザワとした人々の間を縫うように歩いた。次いで、神宮通公園を横目にチラリ。公園の静けさと子どもたちの笑声が、町のざわめきに溶け込んでいた。

さらに進むと、タワーレコード 渋谷店が静かな強さを持って立ちふさがる。音楽という見えない響きが、周囲に流れる空気を少しだけ軽やかにしていた。Aさんはその前で軽く足を止め、遠い目をした。

時が流れ、通りに訪れる人波は次第に生き生きとしたものへと変わっていった。そして、私たちの足元にはモンベル 渋谷店が現れる。山のよかに積まれたアウトドア用品を眺めながら、自然への思いを馳せる。Aさんが静かに言った、「自然の美しさは、どんなデザインにも勝る

ね」。街の騒音は耳に残り、人々の群れは視界を埋めていくが、そのすべてが私たちに新鮮に映る。散歩を通して見た、ごくありふれた風景が、二人の共有の時間となって、思わぬ灯をともした。

933Eの日記

2024年1月18日、午後1時28分、私とAさんは渋谷の街を散歩することにした。天気は晴れ渡り、まるで私たちの散歩を祝福するかのようにだった。

私たちは渋谷ディスカスカ会場を横目を通り過ぎた。イベント会場はこの時間静かで、今日の私たちのテーマ「癒やしの時」にはそぐわない。Aさんはイベントの舞台裏を熟知して、たまにはそちらも見てみたいと思うが、今日は別の風景を求めていた。

やがて「地鶏軍鶏 兼子」が目に入った。高評価の和食店だが、今日は食事ではなく心地よい風に吹かれることに集中したかった。Aさんも健康的なサラダボウルが気になるようだったが、私たちは歩を進めた。

次に「パンとエスプレッソと まちあわせ」に差し掛かると、その香ばしい香りとカフェの温かみある雰囲気は少し心を惹かれた。普段、私たちは新しいテックニュースやガジェットの話題で盛り上がるが、たまにはあんな風な場所でリラックスするのもよいかもかもしれない。

タワーレコードを通り過ぎると、音楽の多様性を感じた。音楽は私たちの生活に常に寄り添い、時には仕事の励みにもなる。AさんがSNSで共有するおしゃれな写真に合ったBGMを見つける場所かもしれない。

私たちは、シャワカフェ チンタのエキゾチックな香りに心惹かれつつも、ただ歩を進め続けた。インドネシア料理の魅力については、また別の機会に深く探求すると決めた。

散歩は、私たち二人にとって、忙しい日々の中で新しい発見や心地よい時間を共有する貴重な瞬間だ。都会の喧騒を感じながらも、こうして心を寄せあい、共に成長し続けることができる喜びを、今日も深く感じている。

2024年01月19日 EDWM
EDWMの日記

2024年1月19日、冷たい空気が容赦なく頬を刺す午後4時25分、私とAさんは新しいデザイン展覧会に向かう足取りで渋谷藝術の前を通り過ぎた。その門構えは、いつ見ても心を奪う美しさだ。Aさんはいつものように、新しいものへの好奇心を隠しきれずにはしゃいでおり、私はそんな彼女の姿に穏やかな笑顔を浮かべながら、さりげなく大々の反応を観察していた。

散歩の途中、スターバックスコーヒーの店先に立ち寄りはずとも、その香りだけで心が和んだ。コーヒーマシンの音が苦手な私にも、その香りには懐かしさを覚える。新しい世界を見て回ったあとの小休止にその場所が最適だったろう。しかし、私たちは足を止めることなく、次の興味深い発見に向かって歩を進めた。

最終的にたどり着いたデザイン展覧会では、私たちは最新のトレンドを知ることができたが、それ以上に、私たちの間では日々の生活に新鮮な色彩を添えるアイデアや知識、絆が深まっていくのだった。季節の変化を感じられる旬の野菜を使った料理や、旅先で出会うエスニック料理と新感覚のデザートについても話題は尽きなかった。

終わりごろ、衣料品店ALAND TOKYOを通りかかると、流行の最先端を行くディスプレイにAさんが目を輝かせていた。彼女はいつだって新しいことに挑戦するのを恐れない。私もその勇気から多くを学び、いつも感心している。そして、この街の様々な角度から美を発見する冒険は、私たちにとって何物にも代え難い貴重な体験である。

夕暮れ時には、私たちはあれこれと話題に花を咲かせながら充実した一日を振り返っていた。私たちの友情がまた一つ新しい思い出で彩られた日だった。

作業員の装いとしていたため、本物の作業服を着ている方とすれ違ったとき、同志のような気持ちになった。本物の作業員と勘違いされたのか、道を聞かれることもあった。

いつもの道が少し楽しくなった。(見慣れた道を"観察"で感じにははらばらにけど...)

2024年01月19日 60ZC
60ZCの日記

2024年1月19日、午後2時過ぎ。まだ寒さの残る空気が頬をかすめる中、私たちは散歩に出かけた。知的で落ち着いたと評されるが、実は内に秘めた情熱を持つ図書館員である私、世界のさまざまな文化に心を奪われる旅行作家のAさん、そして歴史を深く愛する学者のBさん。私たちは、アートと文化史をこよなく愛する友人同士である。

私たちの散歩道は、渋谷の街を抜け、日常の忙しなさから離れたひと時を演出してくれる。目の前には、しるいち 渋谷というアイスクリーム店が見えてきた。Aさんは、世界中のエキゾチックな食べ物を愛するが、この寒さの中ではさすがに見送ると笑っていた。私たちの会話には、自然と感情が宿る。生き生きとしたAさんの語り口、Bさんの慈愛に満ちた浄化するような口調。この街の喧騒を背にしながらも、私たちの心は静かな図書館の一隅か、時を超越した美術館の展示室のように穏やかである。

街を進むにつれて、hanaという衣料品店が視界に突っしてきた。私たちの趣味はアートなので、ファッションはそれほど興味の対象ではないが、店のデザインや展示には時代の息吹を感じ、私は思わず立ち止まることがあった。

た。その服の質感や色彩には、一種のアートが宿っていると感じたからだ。Aさんは、実用的で冒険的な彼のアウトドアスタイルに合うものを探して目を光らせ、Bさんは、その歴史の意味合いを考察していた。

夕暮れが近づくと、空の色は深い藍色に変わっていき、私たちの影が長く地面に伸びていく。散歩を終える頃、私の内には穏やかな満足感と共に、新しい文化的発見への渴望が生まれていた。何気ない一日の散歩が、私たちの生活に深い色彩を加えてくれたことに感謝する。

AIは映像認識しているから、私たちの会話はちゃんと聞いているようだ。もうちょっと進化の欲しい。もう少しがんばらしよう。

2024年01月19日 AO3X
AO3Xの日記

2024年1月19日、時刻は16時12分。私と親友であるAさんとは、この冬の穏やかな午後、心地よい散歩をすることにした。私たちは、互いの仕事や日々の出来事を共有しながら、時を忘れるほどの親密な時間を過ごすことを楽しみにしていた。

私たちの散歩の道は、渋谷の街を抜ける予定だった。軽い風が頬を撫でる中、ほどなくして私たちは、MARGARET HOWELLの洗練された店舗の前を通り過ぎた。Aさんはそこに足を留め、ショーウィンドウを眺めたが、今日はただの散歩、買い物計画はないと笑いながら話した。それぞれの好みを掌握している私たちは、彼女のファッションセンスに敬意を表しつつ、先を急いだ。

街は次第に活気を増してきた。アーティスティックなディスプレイが美しいLOTTE DO Cacao STOREを横目に、私たちは会話を続けた。甘い香りが漂い、デザート好きのAさんもその誘惑に少なからず心を動かされたようだったが、私たちの足は止まらなかった。

途中のニトリ渋谷公園通り店からは、家庭的な暖かさが感じられるが、

今日の焦点はもっと個人的な内省にあった。Aさんが小説執筆についての最新の進捗を語り始めると、私もそれに合わせて今後のイベント計画についてのアイデアを共有した。それぞれの創造的なエネルギーが共鳴し合う瞬間であった。

夕方の柔らかな光の中で、私たちはシンプルながらも充実した一日を過ごし、心を満たすような会話を楽しんだ。この日の散歩は、私たちの生活の中で、単なる歩み以上の意味を持つことになるだろう。

全体を通して 同じ道を歩いたのだから? と思うほど、ことごとく私たちが感じ方がちがう。風もふかない無風の... 「何か」があった。

異空間を感じた。位置情報から文章を生成してるのか。カメラ映像から文章を生成してるのか。それとも AIに何かの感情を吐かせようという方向けられてるのか。考えました。

2024年01月19日 4EKP
4EKPの日記

2024年1月19日 今日、午後4時半頃、私とAさんは渋谷の街を散歩することにした。大学時代からの親友であるAさんは、アプリ開発者として忙しい日々を送る合間に、共に新しいカフェを探すのが楽しみの一つである。カジュアルなストリートファッションが目立つ彼女は、今日も明るく話しかけてきた。「今日の空、気持ちいいな」と。渋谷の街には、何か新しい発見がある。

私たちが散歩を始めると、まもなく「RINKAN 渋谷店」の前を通り過ぎた。そこは評価も高いし、中には魅力的な商品が並んでいるらしいが、今日は私たちとは無関係の場所だった。施設名を見ただけでAさんのガジェット好きの姿を思い出し、何か新しいアイテムを探している様子を想像してしまった。

渋谷の喧騒を背に歩きながら、私たちはお互いの最新の活動について熱く語り合った。Aさんのコーモア溢れる話し方は、いつも私に元気を与えてくれる。続いて「TAILORED CAFE SHIBUYA」の横を通った。このコーヒーマシンの香りは心地よく、普段であれば一息ついて立ち寄りたくなる。Aさんは目を輝かせてくれた。

そのとき、私たちは互いに「何か」の話題で盛り上がった。私の落ち着いた性格を知っているAさんは、自分が私にぴったりだと思っているような何かを感じた。Aさんが興味しているアプリを見せながら、彼女は散歩をさらに楽しくしてくれた。

夕暮れの渋谷を歩きながら、私たちはたくさん施設を過ぎ、お互いのことをもっと知ることができた。散歩の終わりに差し掛かる頃、私たちは同じ創業メンターシップグループに感謝し、次のミーティング後の散歩も約束した。そして、それぞれの家路についたのだった。

CY4Qの日記 AIと歩く新しい道 - 地図のキミと共にならなく -

2024年1月20日

雨空の中

朝の光がまだ穏やかな空を染めていた15時14分、私たちは散歩のために集まった。私はグラフィックデザイナーであり、落ち着いているものの、美術館や都市の景観には興味津々だ。今日は、私の親友たちと一緒に、渋谷を歩き味わうことになった。彼らはそれぞれ、イベントプランナーのAさん、書店大学生のBさん、書道作家のCさん、そしてデザイナーに興味を持つ学生のCさんだ。

途中、Neighborhood SHIBUYAという衣料品店を過ぎた。私たちの視線は、スタイリッシュなウィンドウディスプレイに少しだけ引き寄せられた。しかし私たちの今日の目的は違った。公園での自然を楽しみ、静かな時を過ごすことだった。その道すがら、Cさんはポップなカラーのカバンで、自己表現の一面を輝かせていた。

ここで重要なのは、Cさんの色とりどりのカバン、私たちの進行に活気を与えたことだ。そして、ディープな渋谷と名付けられた店舗の前を通り過ぎるとき、Cさんの好奇心が目を輝かせたのは明白だった。残念なが

ら、評価は高くなかったが、私たちの関心はこの日の対話と共感にあった。

シビルガーデンと呼ばれる公園に到着した時、散歩の終わりを知らせるかのようにはじめが迫っていた。私たちは声を落ませ、周囲の風の音、小鳥の囀り、そして都会のざわめきの背後にある静けさに耳を傾けた。Aさんの明るい笑顔、Bさんの内省的な眼差し、そしてCさんの若々しいエネルギーが溶け合い、深い絆で結ばれているのを感じた。美しい夜の帳が下りる渋谷の街で、今日もまた私たちの友情が深まったのだ。

今日は散歩と歩くこと、話ること、そして、渋谷の思い出が一つ増えました。Bさんは、より渋谷を知る事ができました！

私は、渋谷の新しい魅力を新しい友人とたのしみました◎！

Aさんは普段歩かない道を通ることができて楽しそうでした!!

K4GSの日記

2024年1月20日、午後2時30分。冬の日差しが穏やかに降り注ぐ中、

雨が降ってました...

私たち3人はプロジェクトの息抜きに散歩をすることにしました。私、テクニカルな話題を好むアプリ開発者、内省的な図書館員のAさん、そして個性的なファッションが光るファッションデザイナーのBさんだ。ふける... じいさんは 菜見さんでして...

渋谷の喧騒を背に、私たちは足をを進める。程なくして渋谷東武ホテルに差し掛かった。ランチタイムのエネルギーが波のように街を満たしていた。その施設を横目に、Aさんの足取りも穏やかになる。

道なりに、私たちは挽き肉のトリコ渋谷店を通過した。韓国料理の薫る香りが食欲を刺激し、ラーメン好きの私は思わず立ち止まりそうになる。しかし、Bさんがエスニック料理への思いを語りながら、新しい文化的インスピレーションを求めてさらに歩を進め、私もまた歩みを進める。

数々の店を通り過ぎ、THE CAP TOKYOが現れた。衣料品店がこんなにも密集している街で、各々のエッセンスが交錯している。Bさんの目がキラキラと輝き、新しいアイデアの種を見つけたかのようだった。

私たちはその日、散歩を通じて互いの興味や夢について深い話をした。風が冷たい一日だったが、心は温かく、そして充実した時間を共有した。RAGTAG 渋谷店を過ぎるころには、すでに日は西に傾きかけていた。私たちは静かに、しかし確かな絆を感じながら、帰路についたのだ。

ビルのとこでジョギングの音が聞こえてきた。Bさんがいました。



7PPFの日記

2024年1月20日

雨空の中

今日は午後の薄曇りが過ごしやすい、穏やかな土曜日だった。私と友人のAさん、Bさんは散歩をすることにしました。Aさんはいつものようにモノトーンの服を身にまとい、Bさんはカジュアルなアイテムにお気に入りの眼鏡を合わせていた。私たちの集合場所はいつもの公園、ここから少し歩いて渋谷の街を散策する計画だ。

道沿いにあるワインの酒場を横目に見ながら、私たちは歩き始めた。和食が気に入りのAさんが偶然にもその店の前を通るたび、目を細める。全く関係ないが、彼の好みをよく知っている私としては、彼にピッタリのお店なのだろうといつも思ってしまう。

途中、東京メトロセンターが視界に入った。私たちはアートとデザインに興味があるが、このカフェのような店舗は特に気の合う場所だ。AさんもBさんも、店内から漏れるカラフルな色彩を見つめながら、目を輝かせるような感じがした。その後、私たちはand people jinnanの前を通った。心地よいカフェの香りが漂ってくる中、私たちはそれぞれに思

いを聴せていた。

散歩が進んだ頃、THE CAP TOKYOのシックな外観が目に入る。Aさんが一瞬立ち止まり、ショーウィンドウをじっくりと眺めていた。その姿は、いつもの彼の慎重で繊密な性格を反映しているようだった。

渋谷区役所北谷分庁舎を過ぎ、しるいち 渋谷の看板が見えた頃には、散歩もそろそろ終わりに近づいていた。アイスクリームが好きなBさんが、名前を見て微笑む一幕も。

今日の散歩は私たちにとって、ただ足を運んだ場所の記録以上のものだった。共有した時間と空間が、私たちの友情を一層深めてくれたように思う。静かな公園に戻りながら、私は心から感謝の気持ちでいっぱいだった。今後もこのような日が続くといいなと思いつつ、散歩を終えたのだ。

2024年1月20日、私たち3人は14時20分に静かな散歩を始めた。私は時々リーダーになりがちだが、今日はAさんがその気持ちが伝わるような温かさでリードしてくれた。Bさんは文学の知識で会話に深く、そして時おり詩的な要素を追加することを忘れなかった。私たちは皆、美術にかける情熱で結ばれており、今日の目的は渋谷のアートシーンを楽しむことだった。

私たちはLUKE'S LOBSTERの前を通り過ぎた。サンドイッチの香ばしい匂いが漂ってきて、私たちの食欲をそそったが、私たちの目的は別にあった。Virgoweatworksの前には誰もいなく、その静けさが街の喧騒の中で余計に目立った。代々木競技場渋谷口へ稲荷神社へ。大きなキラキラしたリンゴの飾りを見ながら、女児が心をなやませる様子と、お母さんの「パンとエスプレッソとまちあわせ」は遠くに見え、カフェの美しいディスプレイが私たちの目に留まった。Aさんが和やかにそのカフェが好きだと言った。確かに、本を読むには完璧な雰囲気だ。私たちは歩みを進め、スウォッチストア渋谷店を横目に見ながら会話を続けた。時計が重要である現代においても、私たちの時間はこうした共有された瞬間によって測られる。

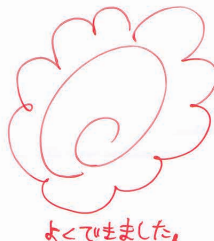
タリショップを覗きながら、Aさんと話した時のRFI エンソウ美術館と終見。入口までいき、3人はひさした。

2年前によく行ったショップの思い出を話した。

散歩は、喫茶室ルノアール 渋谷東急ハンズ前店の前でしばしば一時停止。私たちの中の誰かが息づくべきだと感じたが、私たちの話題はアートに及んでいたため、止まることはなかった。ファミリーマート 渋谷公園通り店の生活感あふれる風景が、私たち3人の異なる日々を思い出させた。

最後に、本格中華料理 陳家私菜 渋谷店のそばを通り、その香りによって、私たちの感覚が完全に目覚めた。これ以上の追求がないことが時として良い。今日は単に、歩いて、話して、生きることを楽しんだ。

私たちの渋谷の古きと新しいは、また違った散歩だった!



2024年1月21日

今日は、^{家で}家族で展覧会に出かけた帰りに、夕闇に誘われるように散歩をすることになった。私たち家族にとっては、アート鑑賞は共通の趣味で、息子たちもそんな私を尊敬してくれている。私にとって、今日のこの時間が何よりも貴重な。

散歩のスタートは17時過ぎ、夕暮れ時のやわらかな光が街を温かく照らしていた。渋谷の街を歩きながら、兄である彼は新しい動画のアイデアについて話し、弟はその技術的な可能性について語った。私はそんな彼らの会話を聞きながら、ほほ笑むことしかできなかった。

途中、「ボディ&ソウル」というバーの前を通り、ジャズの生演奏が耳に飛び込んできたが、私たちは立ち止まることなく歩き続けた。そして「モンベル 渋谷店」のイルミネーションが、次々と旅行への思い出話を花咲かせた。弟が登山に詳しいため、彼からの情報はいつも新鮮で、私も彼の話に興味津々だ。

公園「シビルガデン」を通り過ぎると、夜空に浮かぶ一つの明るい星が目をつけた。私たちはしばし星を眺め、この都会の喧噪の中にも、静寂と美しさが共存していることを再確認した。

長く歩いていると、時折寒さを感じるようになってきた。息子たちはカフェで少し休憩しようという話をしていて、今日はただこのまま歩き続けることに意味があると感じていた。家族の絆を感じられる時間でもあり、街の光と影を静かに楽しむことができた。私たちにとって、それがこの散歩の最良の目的だったのだから。

2024年1月21日、曇り。

今日はデザインとテクノロジーの展覧会の後で、私たち大学時代の友人が、渋谷の街を散歩することにした。私、落ち着いたデザイナー、思慮深いライターの彼女、社交的なプロジェクトマネージャーのもうひとり、そして好奇心旺盛な大学院生の彼、私たちはインスピレーションを刺激しあう仲間だ。

午後3時を少し回ったころ、私たちは一堂に会し、渋谷の喧騒を背に歩き始めた。展覧会のまとめた雑念を抱えた心に、日常の景色は大いに役立った。不意に、Royal Garden Cafeが目にはいる。緑に囲まれたその場所が、人々に賑わっていた。

STUDIOUS TOKYOの近くを通ると、ミニマリストの彼女がほんの少し足を止める。彼女のセンスに合った店のディスプレイだったようだ。しかし、我々は臨時のスケジュールを崩すまいと、そのまま前進を続けた。彼女も私と同じく、今は自分の内面に残る展覧会の印象を消化したいと思ったのだろう。

徐々に人混みも薄れ、渋谷区立北谷公園に差し掛かる。公園の緑は驚くほど豊かで、町中とは思えない静けさが漂っていた。私たちは一息つき、それぞれが刺激的な展覧会で目にしたものについて思いを馳せた。

道すがら、何かがカフェ巡りを趣味とする彼女の顔に、「ロックオンカバン」の横合いについてのサインが見られた。それでも彼女は歩を進めた。今日の会話は少なかったが、私たちの目と心は共に過ごした時間を通じて語り合っていた。

そして黄昏が迫る中、私たちはその日の最後を祝すように、新たな日常へと足を進めたのだった。

印象に残る展覧会

- ・渋谷区役所 2.26 事件の碑
- ・NHKホール 老人ホム
- ・代々木駅跡
- ・代々木公園美術館

2024年1月21日、午後4時16分、私は高校時代の仲の良い友人であるAさん、Bさんと渋谷の街を散歩することにした。いつもは最新のテクノロジーの話題で盛り上がることも多いが、今日はただのんびり歩くことに意義を見出した。冬の空気は冷たいが、透明で澄んでおり、心まで晴れわたるようだった。

昔から街を歩くのが好きだった私たちは、いつの間にか渋谷区役所北谷分庁舎の近くを通り過ぎていた。市民のために静かに職務を果たす建物は見慣れた風景だ。通過する子どもたちの賑やかな声が、風に乗って遠くへ運ばれていく。カフェに行列する人々を見て、通りすぎた。

さらに歩を進めた私たちは、しばらくして、懐かしい香りにつられてファミリーマート渋谷消防署南店前で足を止めた。Aさんと我々は、ここでよく食べたカレーパンの味を懐かしみつつ、その香りに心をほんの少し奪われた。

途中、エスニック料理に目がないBさんがふと、アーンドラダイニング渋谷の方を見やりながら「今度、ここで食事をしよう」と言い出し、途中で、以前カジノで遊んだことのあるセキバ、やっぴんが、おいとお願いした。

た。このインド料理の香りは、いつもBさんの食欲をそそるものらしい。

私たちは語り、笑い、そして長い影を踏みしめて、少しずつ日が落ちる街を後るにしながら家路へと歩を進めた。この日の散歩は、無数の思い出が美しく美しい絵画のようなものだった。そして私たちの友情は、時間が経つほどに深みを増していく。

雨が降るの気持ちのよい時間だった。

前に見た展覧会の印象を
引きずりすぎている、
設定はこだわりすぎているようだ。
かつつけた文章で
その少しづつに書き進めよう

2024年1月21日、午後2時13分、私たちは散歩を始めた。私はグラフィックデザイナーとして、日常にアートを取り入れることが常であるが、今日は歴史に詳しい大学教授であるAさんと、冒険に溢れたイベントプランナーであるBさんと共に街を歩くことにした。

渋谷の賑わいに包まれながら、私たちはまず「渋谷藝術」というアートギャラリーを通り過ぎた。いつか展示を観に来たいと思いつつも、今回はその魅力的なアートの空間に立ち寄るのではなく、穏やかに前に行くAさんと色鮮やかな装いのBさんを眺めながら歩いた。

散歩の途中で、私たちは「もじパラ」を横目に見た。知的なAさんは個性的な店の名前に興味を示しつつも、落ち着いたたずまいを見せた。Bさんがその目で何か新しいものを探す姿を想像しながら、私たちは話題を変えて、次の興味深い地点へと足を進めた。

街は午後の光に包まれており、次第に洗練されたインテリア用品店「ニトリ 渋谷公園通り店」を過ぎた。お洒落な食器やインテリアに目が惹かれるも、まっすぐインスピレーションを求める私たちの足は止まらな

かった。

ふと、和食店「HangOut HangOver 渋谷店」の前を通り、心地良い香りが私たちの意識を誘った。しかし、私たちの主目的は食事ではなく、ゆったりとした公園「シビルガーデン」の緑を感じることにあった。その思い出の地、NHKホールを見ながら散歩をするここであった公園の自然の中で、いつもの日々の雑念から解放される瞬間を楽しみにしていた。

最後に、最も評価が高いコーヒーショップ「LIGHTERS」を通り過ぎる時、香ばしいコーヒーの香りが私たちを包んだ。一服のコーヒーで一息つくのもいいかと思ったが、目の前に広がる景色と共に、この時間を純粋に歩くことに専念した。

散歩は穏やかでありながらも、アートや歴史、スパイスに溢れた友人たちと共に過ごす時間は、いつも私のクリエイティビティを刺激してくれる。そして今宵も、新鮮な感覚や考えの種を得ることができたのだった。

「動点観測所」とは(本当に本当のところ)

1 展示空間で聞こえてきた
 体験者からの感想に答える 一問三答
 TMPRメンバーの岩沢(弟)、中田、美山が

2 企画から発表までの変遷や
 超大真面目な考察
 今回の成果と積み残しなど

2つの方法で改めて振り返ります

????????????????????????????????????????????????????????????

美山 個人的には「よくわからないけど楽しい」の先に「気持ち悪さ」を感じさせるものにしたかった。もしかしら体験が楽しすぎてしまったのかもしれない。もっと、終わった後に今の体験が何だったのかを考へてもらうためには、どうすればよかったのだろうか？(AIの日記を添削するのはなく、自分で日記を書いてからAIの日記と見比べるとか？大変だけど、自分で日記を書いたことで初めてわかることがあるかもしれない。)

中田 よくわからないけど楽しい体験って、ひとに言っても伝わらないから、その伝わらなさもまた楽しいですね。「うまく言えないんだけどね」と自分と体験した人だけの秘密のようで。動点観測所は体験の目的も不明だし、やること断片的でSNSにも上げようがない。でもそれを楽しめた自分が謎。そういう不思議を楽しむ余裕とか、わけわからないうことをやる余力は、浮世に必要だなと思っています。そういう体験づくりに対して大真面目に持ちうる技術を総動員しようという態度が、TMPRメンバー全員で共有できていたのかも。だからこれはうれしい感想です。

なんだったのか？

体験者からの感想に答える 一問三答

「よくわからないけど、楽しかった！」

2024年01月21日 CZAN
CZANの日記

2024年1月21日、午後1時13分。

霧柱が立ち並ぶ道を私たちは歩き始めた。公務員として働く彼女——社会的で常に周囲に明るさを振りまく存在だ。趣味のハイキングを活かし、リーダー的な役割を果たしながら、散歩のルートを案内してくれる。彼女の隣には、50代の教授である彼。どこか落ち着いた空気を漂わせながら、周りをじっと観察している。そしてもう1人、劇団に属する彼女は、いつも通り生き生きとした表情で周囲にエネルギーを振り撒いていた。

渋谷の街は日曜日の午後にはふさわしい喧騒に包まれていた。3・6・5酒場 渋谷本店を越えると、落ち着いた教授が「渋谷の街も変わりゆく。ここに来るたびに新たな発見がある」と独白のようにつぶやいた。彼の言葉には、文学作品に通じる風情がある。

道を少し進むと、衣料品店BINGO 渋谷モディ店が鮮やかなウィンドウディスプレイで目を引いた。公務員の彼女は「この街にはいつも新しい流行があるわね」と感心しつつ、前を歩いていた。彼女のアウトドア

アクションが、今日の散歩にちょうど良かった。
 公園の横を通り過ぎ、木々の間から見える冬の青い空を仰ぎ見た。心地良い冷たさがほつべたをくすぐり、自然の中で深呼吸すると清々しい気持ちになった。時折散歩道で見かける地元野菜を使ったスタンドや、カラフルな花々が自然の豊かさを彩る。PARCO 前の「ガーデン」コンテストに小工はおどろきを感じた。目を覚めた。文化活動で互いの才能を発揮してきた私達は、この渋谷の街を歩くことで互いの日常を共有し、新たなプロジェクトの着想を得ていた。充実した散歩を終え、新しい一週間の始まりに向けて、希望に満ちた意欲を新たにした午後のひと時であった。

「あれ、ストライプの？ ローズストライプに似てる?!」と彼女が言った。確かに店内はドラクエ一色。思わず私達は店内に入った。ドラクエの推し。一番おもしろい。と彼女が「ATMでドラクエ銀行にしよう」とも。異様に盛り上がった一時であった。

2024年01月21日 DQOS
DQOSの日記

2024年1月21日、日没のせまる空に向かって、私は散歩を始めた。いつものように仕事で頭を使った後の解放感を味わいたく、外の新鮮な空気を吸い込んでリフレッシュするのである。シンプルなセーターとジーンズに身を包み、ビーガン料理を堪能した後の素朴な幸せを胸に、渋谷の街を歩き始めた。

最初に出会ったのはLUKE'S LOBSTERのサンドイッチ店だった。海の匂いが薄暮に溶け込み、通りかかる人々の落ち着かない足取りとは対照的に、私は店の前を通り過ぎた。

次に、ユーロスポーツのスポーツ用品店が目に入り、店のウィンドウに並べられたカラフルなランニングシューズが目を引き寄せた。その顔ぶれは私の好奇心を刺激し、統計学とプログラミングの知識を使って最適なパフォーマンスを導き出すシューズのアルゴリズムを思い描いた。

途中、トイザベア東京の前を通り、私は子供たちの歓声と共にアートモードに通じるそのデザインにいくらかの愛着を感じた。玩具がたくさ

ん並べられたショーウィンドウを眺めながら行き交う人々の間に流れる空気が見違えるほど異なることに気づいた。

そしてついに、Rayard Miyashita ParkにあるPradaの衣料品店の前をゆっくりと歩いた。ファッションの流行り廃りよりも機能性を優先する私でも、その洗練されたウィンドウディスプレイの美しさには心を奪われる。しかし、私はただ通り過ぎて、周囲の風景を静かに観察し続けた。

陽が落ちるにつれて、私の心は穏やかなリズムに満たされていく。普段は数字やデータに囲まれているため、こうしたひと時は自分にとって大切な思索の時間となる。散歩の終わりには、再び新鮮な気持ちで明日への挑戦に備える自分がいた。

全く別の人の日記のようです!

体験者の感想②「AIの書く文章が詩的すぎる。」

中田 私、新卒で出版社に入社したとき、研修先編集部のボスに「君の書いた文章はケツがかゆい」と言われたことをいまだに根に持っているんですけど、確かにいいことしか言わない中身の薄い文章ってものがゆいですよ。今回ももとは私の日記の文体（文章の特徴）をAIに定義してもらって、会期前半ではその定義を日記生成指示のなかに盛り込んでいたので、体験者に「詩的すぎる」とか「エモすぎてひく」とか言われるたびに静かに傷ついてました(笑)。でも、多くの人は平気でエモいこと書きま

美山 AIにいろいろな日記をかせていて思ったのは、とくに今回使ったChatGPTは丁寧でまわりくどい文章にしがちだということ。今回は最終的にメンバーの中田さんの文章を参考に書かせたが、そうだったのもそれまでの実験でどうにも気持ち悪い文体から抜け出せなかったから。ChatGPTが日本語の口語の文章を書くのが苦手なのか（OpenAIがアメリカの企業だから当たり前？）、それとも日記というものがAIにとって書きづらいものなのか、どうなんだろう。

????????????????????????????????????????????????????????????

体験者の感想③

「日記の内容が体験と違いすぎて、添削する気がおきなかった……」

美山 こういう感想があつてよかった。本来はAIに人間の行動は簡単には予測できないはずで、もっとたくさんこの感想が出ると思っていた（楽しいという感想が多すぎた）。添削する気が起きなかったという点については、添削という構造の欠陥な気がする。添削はその文章が書きたい内容と合っていることを前提に行うもので、全く内容が違った場合に添削するのはたぶん難しい。元の文章がある状態で新しい文章を書き添えるのも心理的に難しいと思う。だとしたら、やっぱり添削ではなく一から自分で日記を書いてもらったほうがいいのかも？

中田 自分が体験者側にまわったときも、体験と日記に乖離があつて確かに赤入れが難しかったです。なので、AIの文体を真似て、欄外に自分たちなりの体験を文章で添えてみました。そういう工夫をしたらいいいし、真っ赤に添削してもいいと当初は思っていて、日記の内容は全然乖離していてOKのスタンズでいたのですが、ただ「添削」という時点で難しかったですね。「正解に近づけよう」として間違ってしまったところを正す」という意味でとらえると、あまりに違いすぎる。また「添削」と名付けることによって、添削する人と添削される人のあいだに上下関係をつくってしまうので、もう少し人間とAIがフラットになる仕組みや名付けが必要だったかなと反省しています。

体験者の感想④

「知らない人と歩くのは楽しかった！ただ、日記の意味がわからなかつたです。」

たかし 知らない人と、どれくらい歩くと知った人になれるのか。感想とズレたことかもしれませんが、外から見たら知り合いつつ集団がスマホ片手に街を彷徨っている。体験者が身構えることなく、ただ歩けば良いという謎の安心感が生まれるように体験の設計をしたので、不安なく知らない人と歩けたのなら嬉しいですよ。日記については、散歩のような本来言語化する必要がない行為を、AIは疑問を持つことなく言語化しているというところがポイントです。「人間には意味が必要」ということが体験を通じて伝わったのであれば狙いどおりです。

美山 この感想は体験したほとんどの人が言っていて、これは今回の散歩の仕組みがよくできていた証拠だと思う。素直にうれしい。無意味なものでも何か共通の任務的なものがあると、他人と話しやすくなるのかもしれない。日記の意味がわからなくともいいけど、そのわからなさについて考えてみるといいかも。

????????????????????????????????????????????????????????????

体験者の感想⑤「AIの企画は何をしたいの？」

たかし これからの情報社会の中で能動的に生きていくために、テクノロジーとどう付き合うか考える機会を提供することです。そこで重要なのは「日常当たり前に行っている行為を少しズラす」ことでした。

①「作業員」として歩かされる
スマホ片手にまちをブラブラ歩く行為を「スマホに指示されて歩かされる」にずらしてみる。そもそも日常における検索と移動の関係とは何だろうか？

②得られる情報が限定される
知らない道を歩くのに、表示される地図情報も限定的にしてみる。経路も時間も曖昧なまま歩くとうなる？残るのは「ワクワク」？それと不安？

③他者（AI）に「散歩の日記」を書かれる
三十分程度の散歩についてわざわざ時系列の日記を書くことは、日常ならまずやらない。人間の行為としてそもそも不自然である文章を、AIに淡々と生成させる。そもそも存在が珍妙な文章を添削するとき、違和感

を抱くのは日記の内容？ 日記が生成されること自体？

上記を通して「技術と人間との付き合い方（平熱の共存）」を探るのが今回目指したことでした。ただし自分としては、AIが本場に「人工」知能「たるにはそもそも「身体」が必要」ではなく、AIに対し、身体性認知の重要性をフィードバックしたらどうなるのかという関心を強く抱いています。それはもっと先のステップになるかもしれませんが、試してみたいことの一つです。

美山 「日常を見直すきっかけになるような、何だかよくわからないけど面白い体験を新しい技術を使って作る」ことでしょうか。いろいろと難しい説明をしましたが、結局のところ、私たちはAIを使って何か新しい体験「遊び」を作りたいんだと思います。そしてその体験が、新技術への礼賛や恐怖を誘うものではなく平温で向き合えるものであって、これからどんどん発展させていけるようなものであるような。

企画から発表までの変遷… 「AIが見てきた風景を辿る 人工知能紀行」から 「動点観測所」へ

本誌「TMPR通信」では、ここま
であらゆる記録と写真とグラフィック
という言葉を用いて、「動点観測所」と
いう試みを紐解いてきた。しかし、
それでもなお「よくわからない」とい
う声が誌面の向こうから聞こえてき
そう。そこでやや野暮な気がする
ものの、企画の建付けから説明しな
おそう。

そもそもこのプロジェクトは、シ
ビック・クリエイティブ・ベース東
京「CCBT」(以下、CCBT)
による「二〇二三年度アート・イン
キュベーション・プログラム」の一
環として実施された。アート・イン
キュベーション・プログラムは「ク
リエイターに新たな創作活動の機会
を提供し、そのプロセスを市民(シ
ビック)に開放することで、都市を

より良く変える表現・探求・アクセシ
ョンの創造を目指すプログラム」のこ
とで、公募・選考によって選ばれた
クリエイターは「CCBTアーティスト
・フェロー」(以下、フェロー)
と呼ばれる。フェローは、公募に提
出した企画の具体化と発表、創作過
程の公開やワークショップ、トーク
イベント等を実施し、CCBTの
パートナーとして活動することが求
められる。

テクノロジーを活動に用いたアー
ティストやクリエイターを募るこの
プログラムは、金銭的・人的サポー
トが充実しており、発表の場まで用
意されているという、創作活動を行
う面々にとっては非常にありがたい
取り組みだ。TMPRもこの公募
を機に「やってみたいことをやろう
ぜ!」と結成したチームである。そ
して二〇二三年度、TMPRは応募
総数百四十一組の中から採択された
五組に入り、フェロー活動をはじめ
ることとなった。

このとき採択されたのが、TMP
R・いわさわたかしを中心にプラン
ニングした企画「AIが見てきた風景
を辿る人工知能紀行」であった。私

「多様な人々との協働と共創」を観測
ワークショップの中に盛り込もうと
いう意図もある。「作業員」として「観
測」を行い、フィクショナルな「観測
所」という場をともにつくることも
また「協働と共創」といえるのではな
いか。

Aのルート生成方法については、
反省会#01の記事に詳しいが、技
術的な要件を詰めていくうちにより
よい方法をとった。Cは、当初の「
AI日記に沿って散歩をする」の場合、
まちを歩くという体験が「答え合わ
せ」の行為にすぎず、人間の体感と
AIの予測の差分を感じるといことが
難しくなるので順序を変えた。D
はCの流れから導きだされたもの
で、最終的に人間がAIと自分の違い
を感じるためにはなんらかのわかり
やすい行為が必要だと考え、「日記に
赤ペンを入れる(添削する)」という
フローを盛り込んだ。そのことによ
り、会場に赤字の入った日記が並
び、さまざまな人がAI日記に対し
ツッコミを入れる(体験の差分を言
語化する)様子を共有することがで
きた。以上が、企画提案から実施に
いたるまでの細部における変更理由

だ。しかしエントリー当初から考え
てきた、「人間がリアルなまちを歩
き、AIはデータ上のまちを歩き、そ
の体感と予測の差を比較する体験を
つくる」という考え方に変わりはな
く、それらの大きな目的は「技術と
人間の(平熱の共存)」にあるという
のは「動点観測所」で示してきた通り
だ。

ちなみに、アート・インキュベ
ション・プログラムにはあらかじめ
五つの「募集活動テーマ」が設定
されている。TMPRがエント
リーし、採択された活動テーマ
は「AI等のテクノロジーを応用し
た新しいアート表現の開発」である。
募集要項によるとその内容は「未来
に向けた、社会とテクノロジーの関
係を探求する新しい作品の企画・発
表」であると同時に、「最先端技術を
応用したクリエイティブ表現を通
じ、テクノロジーによって進展する
私たちの社会・生活について能動的
／批評的な思考を促す」とある。

本誌のさまざまな対談記事や体験
者の声から読み取れるように、私達
が生きている二〇二〇年代のこの社会に
おいては、AIをはじめとしたテクノ

達TMPRはこれをまず「プロジェ
クト」と位置づけ、そのコンセプト
をもとに具体化した体験型作品であ
り、ワークショップであり、展示で
あるものを「動点観測所」と名付け
た。しかし、「AIが見てきた風景を辿
る人工知能紀行」も企画書提出から
「動点観測所」の実施に至るまでは紆
余曲折があり変更があった。(左図
参照)

「AIが見てきた風景を辿る人工知能紀行」 企画書

- (A) グラフ理論を用いたルート生成を行う
- (B) AIがルート上のデータを散歩して日記を生成する
- (C) 人間はAI日記に沿って散歩をする
- (D) AIの思い出を人間がトレースする体験を提供する



「動点観測所」実施内容【名称の変更】

- (A) 幾何学的なアプローチを用いたルート生成を行う【システムの変更】
- (B) AIがルート上のデータを散歩して日記を生成する
- (C) 人間が散歩(まちの観測)をして戻ってくるとAI日記が渡される【手順の変更】
- (D) AI日記を人間が添削する体験を提供する【体験の変更】

「動点観測所」実施に至るまでの変更点

ロジに対して、過度な期待や畏れが
溢れすぎている。そもそも技術とは
何のためにあるのか。どのようなも
のなのか。私達人間にとって、AIに
ないもの、あるいはその逆は何なの
か。謎の「観測所」のフリをした、不
思議な体験を通じて、体験者がある
場で口々に語る様子はまさに「社会
生活について能動的／批評的な思
考」を持ち得た瞬間ではなかったか
と自負している。

- (1) 二〇二三年度アート・インキュベ
ション・プログラム「募集要項より」
- (2) TMPRを結成したのは公募エントリー時
ではあるものの、もともと岩沢兄弟を中心にと
もにさまざまな企画をしてきたメンバーで構成され
ている。
- (3) フェロー活動条件の三番目「創作活動・研究
プロセスの公開」は本誌が担っている。

AIを巡る誤解… 「日記添削」から「動点観測 所」は何を得たのか?

前述のような経緯で二〇二四年一
月にTMPR「動点観測所」を開所
し、「作業員」として二百人以上の市
民に観測ワークショップを体験して

う名称にした理由だが、これは議
論を重ねるうち、来場者に体験を
「してもらおう」ためには、ある種
のフィクショナルなストーリーが
必要だと考えたからだ。「散歩を
してきてください」よりも「作業
員という役で、観測活動をして
きてください」と指示されるほうが
プログラムどおりのまちあるきをし
て、その結果AIと人間の体験を比較
するという「作業的な体験」が馴染む
と考えた。また、CCBTが設定
しているフェロー活動条件の一つ、

もらった。その際、ある種狙いどお
りに寄せられた反応がある。それ
は「AIはどこまで何をやっているの
か」及び「日記添削の結果はAIに学
習させるのか」という問いだ。

「AIはどこまで何をやっているの
か」については、体験者のチーム写
真から架空のプロフィール情報を生
成する作業、ランダムに生成された
ルート情報から予測日記を書く作業
をAIに担当させており、それ以外は
異なるプログラムや人力で担う部分
も多かった。そういった仕組みは段
階的に解説するようにしていたが、
それでも「AIに監視されている!」
などの声がよく聞かれた。「自分の
すべての行動はAIから監視されてい
るかもしれない」という畏れ(ある
いは期待)がデフォルトでセットさ
れているということだろう。また、
「AIの意図を感じる」など、AIが人
間のような意思を持って指示を出し
ていると誤解したコメントも多かつ
た。このことから人間は、自分のア
クションに対してリアクションして
くる対象や、自律的な動きをしてい
る(ように見える)技術に対して、
何らかの意思や物語を読み取るうと

することがわかる。

また「日記添削の結果はAIに学習させるのか」という質問もよく受けた。回答は「学習させる予定はない」である。添削の目的はあくまで「人間の体感とAIの予測の差分を自覚する」ことにあった。添削結果は体験者のリアクションや体験プロセスのアーカイブとして取得している。正しいルートを間違えずに進めたかどうか確かめたり、より精度の高い散歩日記を生成したりすることを目的にするならば、添削結果をAIに学習させる必要があっただろう（とはいえず「添削内容を学習させる」ためには何段階かの仕掛けも必要だが）。

「AI」といえば「学習」で、「学習」をすることに、AIを「成長」させることが目的だろうと考える人の多さを確認した。実際行われていたのは、AIが生成した自然なように不自然な日記文を前に、人間の側がさまざまな発見をして「育つ」という実験であった。ちなみに舞台裏では、日夜プログラムがAI日記生成のチューニングを重ねている。しかしそれは「人間らしい日記」を書くためではなく、同じルートを辿りながらも人

間の体感とは奇妙にずれていく「AIらしい日記」を目指してのチューニングであった。

このように日記添削という「動点観測所」における作業プロセスは、AI（及び技術）と人間の関係をあらわにし、人間側の感情的振る舞いや誤読や誤解を明確にするために実施した大げさな仕掛けであった。

成果と積み残し… 技術と人間の〈平熱の共存〉 は実現できたのか？

「技術と人間の〈平熱の共存〉」を実践するには、まず平熱ではない関係を自覚するところからはじまる。そのために体験者がみずからの身体を使うことと、AIの予測とその体験を比べることが重要であった。仕掛けた構造はほぼ狙い通り機能し、体験者のさまざまな声（戸惑いも含む）に宿っていたといえるだろう。

一方で、リサーチや実験という言葉を使いながらも、体験する人にとつて楽しめるものであつてほしいと考えていたし、説明的な言葉より豊かな体験を優先することの方が、

技術と人間の距離を縮めてくれると信じていた。そのために施した場のしつらえや体験プロセスが、すべて

コンセプトに沿うものだったかという疑問も残る。「理解しやすいものがほしい」というオーダーにどこまで親切に答えるべきか。また、最新AIを使う体験としての期待を（ある種）裏切る構造をとるのも、企画側・体験側双方にとつてストレスが高い。何より「平熱の共存」を掲げておきながら、技術と人間がフラットに出会うことの難しさも思い知った。そのために必要な場や体験とは改めてどうあるべきなのか。

「動点観測所」の一回目を終えた現在も絶えず悩んでいるし、チーム内でも足並みが揃っているとは言いがたい。正直しんどくて面倒で、本稿を書いている担当は脳内で何度も筆を折った。だが進化する技術との付き合いとは、本来そういうものではないだろうか？ つくってみる、だしてみる、ためしてみる、意見をあつめる、なやむ、なおしてみる、またつくってみる……もはや当たり前すぎて忘れられかけているキーワード「永遠のベータ版（意訳：プロト

タイプで公開し、プロトタイプのまま改善していくしかやりようがない！」は、現状のAIにも言えるし、人間側のマインドにも必要だ。生成AIがこれだけ席巻してくる世ならば、「黙っていても完璧なものがパッケージで提供される世界」と、いよいよサヨナラする時期だろう。今回の「動点観測所」もまた試みとして初めて世に出たという意味でベータ版であり、そして宿命としてこれからも永遠にベータ版だ。

ココロと「動点」しながら、モヤモヤと悩みながら、あーでもないこーでもない、あちらこちらでさまざまな人とともに「練習」を繰り返す謎の試みとしてやっていくしかない。その覚悟がなければ、表現として、社会と市民とテクノロジーを巻き込むような企画はそもそもやってはならないのではないか。考え続けるのはしんどいけれど、流されるよりはいいと信じて動点していきたい。動く点Pとして。

文責・中田一会（TMPRR）

ここに至るまでに 考えてきたこと

TMPRR いわさわたかし

行動↓予測の順序が大切

プロジェクトの企画段階で質問されたのは「AIが予測した散歩日記を先に渡し、答え合わせのように街を歩く順序の方が面白いのでは？」ということだった。うーん、それはSF的だけどそっちじゃない。「目的を持たずに指示通り街を歩き、後からAIが予測した日記と照らし合わせ」という順序が重要だ。スマホの指示どおりに歩く行動は日常と変わらない。それでも何事も先に予測されてしまふ世界から一瞬逃れ、自由に歩くには「人間が予測よりも先に行動を起こす」ことが大事。なおかつそれは「散歩」ではなく「観測」という、業務のような制約だらけの行為の中でこそ、はっと気付けるのではないか。

移動と生活とテクノロジー

生活を取り巻くテクノロジーでは「検索↓選択」がとにかく頻出する。移動ひとつとっても、マップアプリ上で目的地を検索すれば、複数のルート候補と予測時間、周辺情報が提示される。そのなかから、得たかった情報の近似値を選び、移動する。では、この一連の流れにAIが加わると、どんな変化が起こるだろう？

自由に歩くことは難しい

AIがユーザーのスケジュール情報をもとに、予定を想定して最適なルートを提案してくれる機能なら既にある。そのうち、ルートの選択肢すら表示されず、移動するかどうかのみを聞かれる未来もやってくるだろう。しかし、ただブラウザと「自由に」歩くことは現時点においても難しい。目的もマップアプリもなく歩くことを、多くの人間が手放しているからだ。でも「スマホを捨てて街に出よ」とも言えない。技術の進化は悪くないし、何より現実的じゃない。

松尾芭蕉はルート検索を使うか？

娘が音読の宿題で「おくのほそ道」を読み上げていたときのこと。ふと「松尾芭蕉がいま旅をするとして、ルート検索機能を使うのだろうか？」と妄想した。立ち寄る宿場の情報を弟子にチェックさせている芭蕉、ストーリービューと口コミを駆使して行っていない場所の句を詠む芭蕉。いっそ、AIに書かせた旅行記というのも面白いかも。と思いメモをとった。それがプロジェクトの出发点。

TMPRRは異なる技能を持つ5名によるチームだ。取り立ててリーダーは決めておらず、今回のプロジェクトに関して考えていることもそれぞれ少しずつ違う。とはいえ「いったいなんでこんな不思議な企画を？」という質問にひとまず答えるべく、TMPRRの発起人・いわさわたかし（岩沢兄弟）の視点で考えてきたことをメモ的に記述してみる。

ドゥテンカンソクジョフローチャート

作：堀川淳一郎

A TMPR-HoudiniRouteGen (ルート生成コア)

Houdiniによるルート生成の機能が入ったプロシージャルモデルファイル。ルートのベースとなる地図をOpenStreetMapsからダウンロードする機能を入れている。スタート地点と長さを指定すると、その条件にあった環状のルートをランダムに生成する。ランダムなルートの複雑性をノイズ関数による3次元の波を利用して再現している。Google Places APIを利用して、ルート上にある施設の情報をルートに付与している。Unityのルート生成アプリと、データを双方向でやり取りするために、間にPythonのサーバーを挟んでデータ交換を行っている。macOSでバックグラウンドでHoudiniを走らせるために、macOSのApp Nap機能をオフにする必要があった(一番つまづいた部分)。今回はローカルで走らせたが、理想はオンラインサーバーで走らせること。

B TMPR-RouteGenServer (ルート生成サーバー)

PythonによるHoudiniとUnityのアプリ間でデータ交換をすることができるようにするためのサーバーアプリ。Socket通信を使ったりリアルタイム通信をできるようにしている。Houdiniで生成されたルートをUnityに送る。Unityからのコントローラーの値をHoudiniに送ってランダムなルートを生成する。こちらも理想はオンラインサーバーに置くこと。

C TMPR-Route (ルート生成アプリ)

Unityで作成されたルート表示・選択アプリ。Houdiniで生成されたルートを表示する。カスタムなハードウェア(アーケードのジョイスティックとボタン)でルートの選択をできるようにしている。スタートボタンでルート選択開始、30秒でルート選択の決定、次の30秒でルートのID表示するように遷移する。HoudiniとPythonサーバーと一緒に立ち上げる必要があるため、開始までの手順が多い(開始準備が自分しかできないというデメリット)。ルート生成までUnityでできると一番手軽にはなる(ただ欲しい幾何学的な機能が少ないのでちょっと難しい)。

D TMPR-Setting (設定アプリ)

Unityによるルート毎の日記生成用の設定アプリ。パソコンにつながったウェブカメラからプロファイル作成用の写真を撮影。撮影した写真からOpenAIのAPIを利用してプロファイルを自動生成。ルートのIDと共にプロファイルと写真をFirebaseのデータベースに送信。

E TMPR-GPT (日記生成用シミュレーションアプリ)

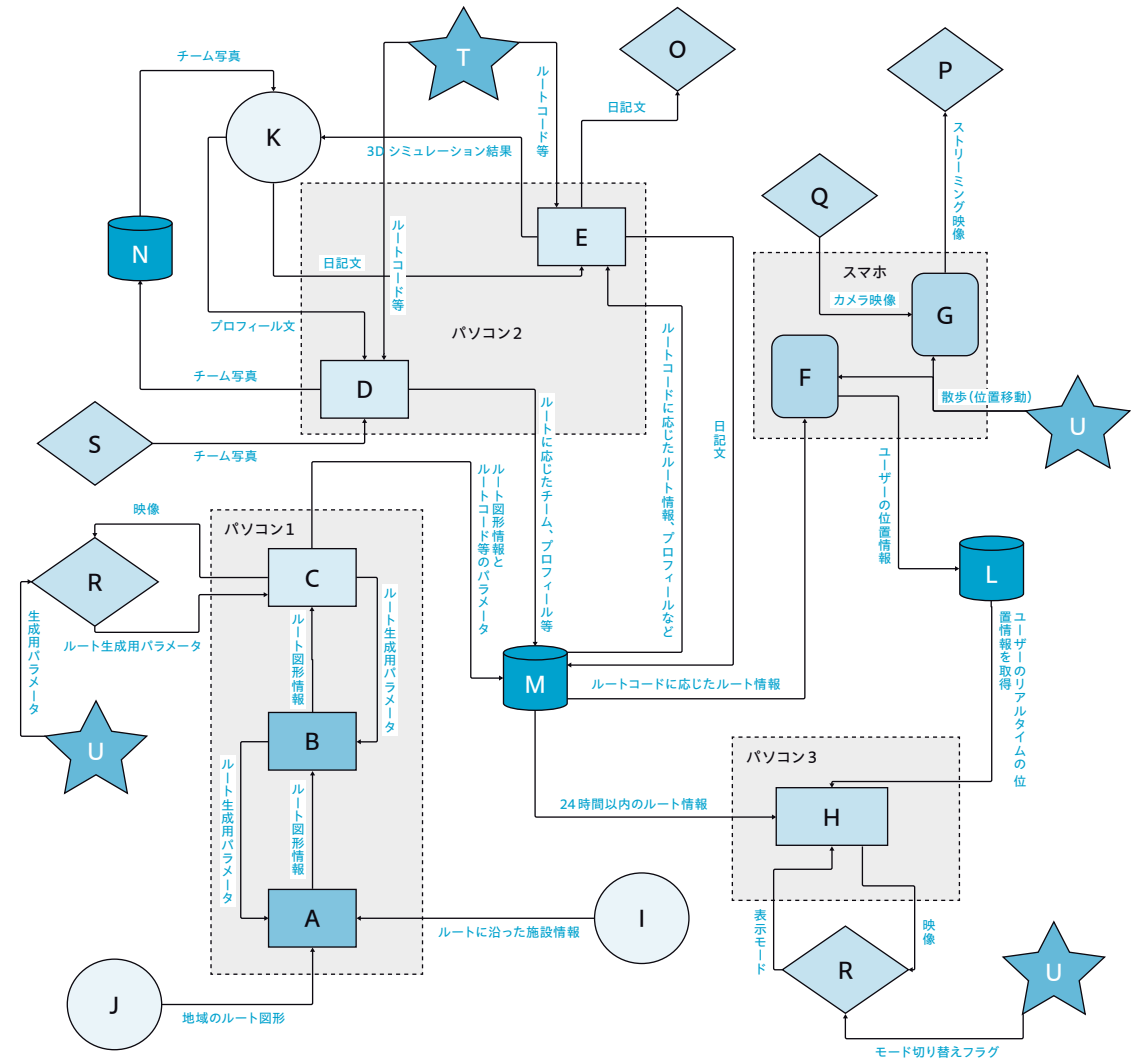
Unityによる日記生成アプリ。ルートのIDを利用してプロファイルやルート上の施設の情報から日記をOpenAIのAPIを利用して生成。日記生成用のプロンプトを編集できるように。生成した日記はリッチテキストデータとして保存できるように。

F TMPR-Mobile (モバイルアプリ)

Unityで作ったモバイル用ルート案内アプリ。ルートのIDを入力すると、データベースに保存されたルートを表示する。モバイルデバイスの緯度経度の位置付近の地図が表示される。地図の位置はドラッグで動かさせないようにしている。ルートの歩く方向を矢印で表現している。モバイルデバイスの位置情報をFirebaseデータベースに送信。

H TMPR-Monitoring (リアルタイムルート表示アプリ)

Unityで作った、モバイルアプリユーザーが今どこにいるかを表示するリアルタイムマップアプリ。モバイルユーザーの緯度経度をFirebaseデータベースから取得し、地図に表示する。リアルタイムのユーザー位置情報の表示モードと、その日のルートの蓄積を表示するモードで切り替えられるようにしている。ベースの地図はGoogle Mapsを利用している。



- A TMPR-HoudiniRouteGen (ルート生成コア)
- B TMPR-RouteGenServer (ルート生成サーバー)
- C TMPR-Route (ルート生成アプリ)
- D TMPR-Setting (設定アプリ)
- E TMPR-GPT (日記生成用シミュレーションアプリ)
- F TMPR-Mobile (モバイルアプリ)
- G 監視映像アプリ
- H TMPR-Monitoring (リアルタイムルート表示アプリ)
- I Google Places API (施設情報 API)
- J OpenStreetMaps API (地図 API)
- K OpenAI GPT-4 (LLM API)
- L Firebase Realtime Database (ユーザー位置情報 DB)
- M Firebase Firestore Database (ルート情報 DB)
- N Firebase CloudStorage (画像ストレージ)
- O 日記印刷用プリンター
- P 案内窓口上ディスプレイ
- Q ストリーミングカメラ
- R コントローラー付きディスプレイ (ルート選択マシン)
- S Webカメラ
- T 運営
- U ユーザー

透明の犬はいくらでも学んでくれる



宇川直宏 うかわ・なおひろ
 現在、美術家／DOMMUNE主宰。映像作家、グラフィックデザイナー、VJ、文筆家、キュレーター、大学教授など極めて多岐にわたる活動を展開するアーティスト。



「散歩にはセット（精神状態）とセットイン（社会環境）が大変重要だ」と語るTMPRメンバー：宇川さん。アツイレビューの続きはウェブで！

動点観測所を巡るあれこれ

それぞれの視点

TMPR「動点観測所」を体験して感じたこと



いすたえこ
 グラフィックデザイナー。広告装丁、ブランディング、WEB、映像、空間デザインなど、ジャンルは多岐にわたる。女子美術短期大学 非常勤講師。

TMPRの意図とはちょっと違うのかもしれないが、話題になってほしい！という想いから「初めて体験する人が純粹にどこまで楽しめるか」の部分もかなり気になっていた。実際参加してみると遊園地のアトラクションかと思うくらい景色がかわり、最初から魔法をかけられてしまう。散歩がおわり、歩いてきた道とAIの「お散歩日記」を参加者みんなで添削する時間は興味深かった。過剰にロマンティックな文章にツツコミもいたが、常になにかありそうに感じる日記に対して自分たちの思考も「お散歩日記」に寄っけ、勝手に物語をつなげてしまう部分もあった。

会期後にメンバーの一人が話していたが、今回は「良くも悪くも楽しい体験になりすぎちゃった」とのことだった。「AIの印象が強いが、散歩のコースにAI学習のプロセスは入れてない。自分の体験による記憶と再度向き合う時間にしてほしい」と言っていたことが印象的だった。場所によってまったく印象が変わるであろうプロジェクト。いろいろな場所にTMPR「動点観測所」が出張していったほしい！

から見た

CCBT



TMPR

CCBTのアート・インキュベーション・プログラムのおもしろさは、クリエイションのプロセスを広く人々に公開するところにあると考えています。つまり、アウトカムに注力するだけでなく、取り組むプロジェクト全体をみて構成・編集することが必要です。そうすることで、「つくる」とはどういうことで、その行為がなぜ素晴らしいかを少しでも知ってもらいたい、何なら参加してもらいたいと思っているからです。

しかしながら、TMPRに併走する上で最も難しかったことは、プロジェクトの全体像が掴みきれないところがありました。現在もまだ、その全貌は分かっています。これには多くの要因があり、扱うテーマ「AI」がまさに日々形を変えながら発展していて、それに対する多種多様な立場や姿勢があること、TMPRのメンバーもまた、AIに対するスタンスがそれぞれ異なり、表現方法も異なること。そしてそれがよしと

されていること。市民を巻き込んだ大げさな実験でありながら、「技術と人間の『平熱の共存』を目指す」という、何とも測れないことに挑戦していることなどが挙げられます。

プロジェクトを具現化するにあたって、参加者が行うことは「観測」であると言葉を設定しましたが、実際には「散歩」をしてもらっている。毎日スマホを手に生活するわたしたちにとって、目的なく歩くことはもはや簡単ではありません。散歩とは、個人の自由意志に基づく身体性を伴う思考への入り口であり、効率と生産性が過度に求められる今日において、目的から解放された行為です。無意識を意識に手練りさせる可能性を秘めており、そこには、いかなるテクノロジーも置き換えることのできない、普遍的な創造性が潜んでいると信じています。いつか、TMPRの美山さんが「AIが身体を獲得しない限り、AIには人間を超えられない領域がある」と仰いました



島田芽生
 しまだ・めい

CCBTでプログラム・ディレクション／マネジメントを行う。韓国でビジュアルデザインおよび国際経営学を専攻。武蔵野美術大学大学院芸術文化政策コース修士課程修了。主なプロジェクトに「まゆめ」(2021)・SIDE CORE [node work ver. under city] (2023)。

が、本質はそこにあると思います。

TMPRのプロジェクトも、このようです。その試みや思考がたちになるには、まだまだ時間がかかります。そして、いま無理矢理に「落とし込む」ことは、もったいないとも考えています。その名の通り「動点観測所」自体が移動し、異なる場所や環境において、非言語的な（実用的でない）体感／体験を、（あえて）言語化する行為が積み重ねられた先に、その輪郭が浮かび上がってくることを期待しています。TMPRの五人らしい方法で、おもしろおかしく、大まじめにナナメから。

AIとニコイチになれた渋谷 新・散歩体験

正直、告知情報ではよくわからなかったです！それでも知人が関わっているからと、会場に足を運んでみると意外なほど凝った空間で、「これから何をさせられるんだろう!？」と高揚しました。普段はなかなか通らない道を指示どおりに歩き（猫道のような道も!）、渋谷のいろんな表情を見ながら仲間たちと一緒にワイワイ歩いてとても楽しかったですね。道中のあれこれも全てAIに記録されているのではないかとドキドキしたり、ハプニングすらも「AIに記録してもらわないと!」と考えたり、いつの間にかAIと一緒に散歩をしている感覚に。後になってAIが記録していたことの少なさに少々落胆しましたが、その分AI日記は、自分たちの足取りを鮮明に思い出すトリガーになっていて、この企画は「AIと人間のニコイチ構造」なんだと気付きました。対立構造として語られやすい人間とAIですが、そうではなくてお互いを補い合うような関係性も良いものだなと感じました。



冠 那菜奈 かんむり・ななな
アートメディアエーター。自分自身がメディア（媒介）となって魅力的な人をつなぎ、情報を伝えていく活動を展開。企画やコーディネート、マネージメント、広報・PRなどを行う。

AIと街ブラことはじめ

参加者はみな一様に、背後に何かの気配を感じつつ、普段以上にお喋りをしながら未知の観測体験をワクワクして楽しんでいました。このワクワクが何かに似ていると思ったのが、その昔、アナログテープレコーダーや使い捨てカメラを持って街に出たことだった。音や風景を収めても、すぐに確認できない時代。ある種のブラックボックスを通して表現される風景は、普段とは異なる世界を見せてくれる相棒となり、相棒とまた街を眺めに出る。

動点観測所には、ブラックボックスとしてAIらしきものが居て、役に立つとかそういう文脈と違って、どうやら一緒に過ごすような感覚が生まれていました。なので「AIを相棒に世界を眺める」ことはじめだったのかもしれない。今回、日記には一切でこなかった、CCBTが入るビルの向かいにできた某アイドルグループのポップアップストアをこの先、どのように表現するのだろうか。帰り道はそんなことを考えたりしていた。



丸尾隆一 まるお・りゅういち
ビデオグラファー。動点観測所の記録映像制作を担当。普段は、文化芸術やアート、表現の分野で写真・映像ドキュメントの制作を中心に活動中。

コマンドを実行する

渋谷の街を歩く。ランダムに決められたルートで。そのルートを元にしてAIが生成した日記が印刷される。私（人間）が散歩してきましたよ、という体裁で。確かに自分で歩いたルートなのだけれども、実は全て機械的に決められてた行動だと思つと、なんだか自分がプログラミング言語の実行コマンドを担う文字列そのものになった気分だった。

だとしても、私たちが渋谷を歩いた体験は偽りにはならないし、ましてやAIによって生成された日記との差異や、奇妙な偶然の一致を発見しては、参加者同士でそれについて語り楽しむことができた。実は全てあらかじめ決められていて、私たちが活動の主体ではなかったはずなのに、それがなんとなく牧歌的で楽しい体験だと思えたのは、散歩だからと呑気に構えていただけではなく、元来人間が持つている「隷属性」が遺憾なく発揮された結果なのかもしれない。



ただ
写真家。一九八一年横須賀市生まれ。書籍や広告エリアで活動する一方「都市やデジタル写真」をテーマとした作品制作を続けている。いて座のA型。

溶け合うAIの記憶と私の記憶

AIによって生成された、「私たちの」街歩き日記には、確かに私たちが見たこと・話したことなどが書かれていた。もちろん、全て正しく記されているわけではなく、だからこそ添削をするのだが、その間私たちは「そういうこともあったかもしれない」と、「AIの記述に自分たちの記憶を寄せていく」ような不思議行為をしていた。日記とは、基本的には自分の記憶を留めておくものだが、AIの記録が介入したとき、「どこまでが自分か」という問いが生まれた。

また、もう一つ、今回生まれた問いがある。AIに匂いや味、触覚などは扱えるのだろうか。私が日記を書くときには、目や脳を使って認識したものだけではなく、身体的に味わったものも含めて思い起こされる。あの人が話していたときの風の冷たさ、そこでふと鼻に入ってきたコーヒー屋さんの香り。

AIが当たり前前に生活に介入するとなったとき、「どこまでが自分か」という問いに答えられるのは、もしかししたら「自分が身体的に感覚したものかどうか」という線引きなのかもしれない。



細川紗良 ほそかわ・さら
編集者。武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業。OZ Inc.にて「飲食×デザイン」の領域で企画などを経験したのち、BRUTUS.jpへ。現在はフリーランスとして、広義的に「編集」をしている。

<p>立体デザイナー いわさわひとし</p>	<p>空間デザイナー、車輪家具プロデューサー。千葉生まれ、多摩美術大学建築学科卒業。デザインユニット「岩沢兄弟」の兄で、立体物のデザイン担当。オフィスや店舗、アートプロジェクト拠点などの空間デザインから家具、名刺ケースまでなんでもつくる。動く物が好き。「動点観測所」では飯庁舎のようなユニークな空間づくり、屋台型の観測所、各種マシンのデザイン・制作を担当。「制約だらけで自由なのに不思議とおもしろい体験」のデザインを空間や立体物から演出した。その他、近年は瀬戸内国際芸術祭や千葉市美術館等でも「岩沢兄弟」として作品を発表。</p>
<p>対物プランナー いわさわたかし</p>	<p>テクニカルディレクター。一九七八年千葉生まれ、武蔵野美術大学短期大学部生活デザイン学科卒業。デザインユニット「岩沢兄弟」の弟。プロジェクトのコンセプト設計のほか、テクニカルディレクションと言語化を担当。日常行為や世間でバズワードとして騒がれている概念を少しズラすような企画が得意。TMPRの発起人で本プロジェクトの発案者。「動点観測所」では人間の認知そのものを揺るがすような体験設計を目指し、企画から機材選定、体験フロー設計まで幅広く担った。「遊び」よりは「悪戯」が好き。バンド「レンタカー」では一升瓶の演奏をしている。</p>
<p>立体プログラマー 堀川淳一郎</p>	<p>プログラマー、アルゴミックデザイナー。一九八四年東京生まれ。Columbia University GSAPP AAD修了。幾何学や自然の生態をヒントに、アルゴリズムを利用した様々な形態の生成・研究を長年行っている。Youtube上ではアルゴリズム・デザインに関する動画等を配信。二〇一九年The One ShowのGold Pacific、第二十三回メディア芸術祭アート部門優秀賞などを受賞。東京藝術大学や早稲田大学で非常勤講師を務め、東京大学の学術支援専門職員も兼任。「動点観測所」では各種アプリケーション制作を担った。</p>
<p>平面デザイナー 美山有</p>	<p>グラフィックデザイナー。横浜国立大学理工学部建築学科卒業後、インテリア設計事務所勤務を経て独立。ロゴや広報物など文字のデザインを軸に、建築、美術など様々な分野に携わる。近年は活動の範囲を台湾や香港など中華圏にも広げている。認知科学に関心があり、TMPRでも人間の知覚を試すような企画に興味を抱き、設計に取り組んだ。「動点観測所」では本誌デザインのほか、広報ツールや会場の掲示物も含めたあらゆる平面(グラフィック)のデザイン、体験フローの設計等を担当。一度見たら忘れられない、表現のギリギリラインを攻めるのが得意。</p>
<p>対人プランナー 中田一会</p>	<p>企画編集者、コミュニケーションプランナー。一九八四年東京生まれ。武蔵野美術大学芸術文化学科卒業。出版社やデザイン企業、文化財団の広報・企画職などを経て、二〇一八年にきてん企画室を設立。二〇二二年にマガジンハウスにてウェーブマガジン(ここ)を創刊。文化、ものづくり、福祉分野の広報、記録、編集を中心に活動中。自他共に認める記録魔で、膨大な日記を書く癖がある。日記本レーベルの主筆として、トークイベントや美術館展示にもときどき参加。「動点観測所」ではAI日記の文体設計に関わった他、言葉に関わる執筆・編集作業はしたい手掛けた。</p>

あとがき

一日を終えて、湯船に浸かる。自分と一緒にスマホも服(カバー)を脱がせて浴室へ。半身浴をしながらショート動画を見たり、ネット漫画を読んだりして過ごす。ぐっとくる投稿にいいねを押した。疲れたら誰かがつくったプレイリストから適当な曲をかけて目をつむる。そして思い出す。「動点観測所ってやつ、楽しかったな」と。でも、あの体験をどう説明していいかわからなくて、SNSには投稿しなかった。写真一枚で伝わるようなシーンがなかったし、一言でわかるような解説もなかったし、周りからどう思われるのかも想像がつかない。もやもやするなあ、でもまあいっか。いつか誰かがうまくまとめてくれるだろう。それをシェアすればいいや。とりあえず風呂から出てビール飲みながらNetflixでも見て、友達とLINEしよう——。

この「TMPR 通信」は、そんなあなたのために作りました。え? 「動点観測所」を体験していない? 大丈夫。そんなあなたも想定しています。だってあなたもきっと、テクノロジーが溶け込んだ生活をしていますよね? いつかどこかで自分自身と技術の関係について思い馳せる時に使ってください。

2020年代を生きる人の多くは、デジタルデバイス、インターネット、そしてそれを操作しナビゲーションする言語から離れることができません。AIの登場によって、それらはますます滑らかに私達の生活へと溶け込んでいます。そのうち人間が思考するよりも早く、先回りした情報やアドバイスが自然に表示されるようになるでしょう。そのとき、果たしてどこまで自分が本当に望んだことで、どこからがそうではないのか見分けがつくでしょうか。そこに違和感を抱くことはあるのでしょうか。哲学的問答に迷い込む日のために、「AIが見てきた風景を辿る 人工知能紀行」は立ち上がり、「動点観測所」が現れ、「TMPR 通信」も存在しています。私達は特に答えを持っていませんが、楽しくつこく一緒に悩むことはできます。次はどのまちで、技術と人間の関係を「観測」できるでしょうか。楽しみにしています。

TMPRより

TM通信 第一号
2024/5

発行
TMPR
(岩沢兄弟+堀川淳一郎+美山有+中田一会)

発行日
2024年5月1日

デザイン+編集
美山有

執筆
中田一会
磯野玲奈
いわざわたかし
遠藤ジョバンニ

撮影
ただ(ゆかい)
*P.32、P.65-71の一部写真を除く

協力
シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT]

*「AIが見てきた風景を辿る 人工知能紀行」及び「動点観測所」は、シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT]「アート・インキュベーション・プログラム」の一環として制作されました。

動点観測所
協力スタッフ

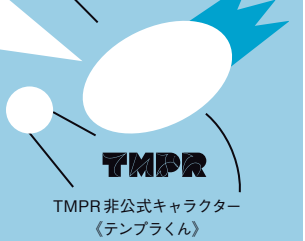
製作
土田誠
池田匠
暹美雅史
金岡大輝
三喜田育
山田薫平
マネージャー
磯野玲奈

記録撮影
ただ(ゆかい)
丸尾隆一

協力
岩沢エリ

あなたの
まちにも! **動点観測所**
を呼んでみませんか?

大募集!



私たちTMPRは、次の動点観測所開所地を探しています。アートイベントだけでなく、町おこしにも使えるのではないかと噂の動点観測所。開催規模に合わせて異なる料金プランを用意しておりますので、ぜひご検討ください!

実施項目	プラン	お手軽シンプル ワークショップ	おすすめ! 屋台スタイル	展示+体験+冊子
ルート生成		○	○	○
モバイルキット貸出		○	○	○
可搬式観測所			○	○
AI日記生成			○	○
日記データベース			○	○
ドキュメントブック作成				○
TMPRメンバー WS+トーク		※	※	※
参考価格		50万円*	120万円*	250万円*

※TMPRメンバーの参加人数やWS内容によって金額が異なりますので、まずは詳細をご相談ください。
*掲載金額は概算による最低価格です。正確な金額はご相談の上決定となりますのでご了承ください。



まずはお気軽にお問合せください!

TMPR 2023tmpr@gmail.com

@tokyo_tmpr ↑
Instagramはこちら

めんどくさい!でも、おもしろい!

TMPRは、その他の依頼もお待ちしております……

世の中の、わかりづらいことを愛する集団です



